
真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

息抜き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

【Zコード】

Z5869S

【作者名】

息抜き

【あらすじ】

この作品は「真剣で私に恋しなさい！」の一次創作です。

主人公最強、ハーレム・・・とまではいきませんがその領域に片足を突っ込むくらいはするかもしれません

この作品の目的は、「真剣で私に恋しなさい！」竜舌蘭 の条件を男才リ主に完膚なきまでにぶつ潰してもらい、皆仲の良い平和なまじっこいを送る「つい」というものです

なので、ネタバレを多分に含みますので原作未プレイの方はお気を付けください。

誤字誤表現多々あると思いますが、それでも構わない！…という方は
どうぞ

プロローグ

俺、識丈悟は物語が大好きだ。

本はもちろん、ゲーム、アニメ、語りに至るまでジャンルは問わない。

子供の頃から物語を読むのが好きだった俺は、文字が読めない時は母に昔話を何度もせがみ、ひらがなを覚えてからは絵本を、漢字を覚えてからは漫画や子供でも読める簡単な本を読んでいた。

それはもう四六時中読んだ。家から出ることは殆どなく、図書館と本屋を行くくらい。

幼稚園に通つていない俺は半引き籠り状態と言つてもよく、五歳になるころには1000を超える物語を読んだ、と母が言つていた。ジャンルは様々、日常、SF、ファンタジーと色々なものを読んだものだ。

さて

突然だけどここで一つ質問をしたい

人は時速100キロで走ることが出来るか？

人は手や目からビームを出すことが出来るか？

人は水の上を走ることが出来るか？

答えは勿論不可能

時速100キロで早く走ることが出来ないから車が生まれ、素手では離れた場所に攻撃出来ないから弓や銃が作られ、水の上を走行できないから泳ぎや船が存在する。

俺が読んだ日常のジャンルの物語でも、先ほどあげたような超人的な芸当を行う描写は殆ど無い。

あつたとしても、それはギャグシーンであつたり、少し非日常要素をその物語の世界観に元々含んでたものだ。

人は空も飛べないし、素手で滻を割ることなど出来ない。

残念ながら魔法使いはいなし、高度な知能を持つたA.Iや、ロボットが出来るのは何十年、何百年も後。
それが俺にとっての一般常識だった。

そう、「だつた」のだ。

この表現で分かる通り、そんな様々な物語を通して積み上げてきた俺の一般常識を粉々に粉碎されたのは俺が6歳の誕生日を迎えたとき。

来年から小学校に通うにも関わらず、家から殆ど出ず外の世界に関わりを持とうとしない息子に友達は出来るのだろうか？
といつ心配をした両親に説得とお説教を兼ねた話をされた。

確かに、いつも外に出るときはどんな物語に出会えるか？ということに頭が一杯で、帰るときは大量の本を手に入れた満足感で周りが見えず、近所にどんな家が建っているかすら覚えていない。

覚えてるのは我が家と、図書館、それといつもお世話になっている商店街にある川神書店くらい、道もその三か所を結ぶ最短距離しか知らない

一通りのジャンルを読み終え、自分が住んでいる世界にも興味が出て俺は、週の半分は外に遊びに行くことを約束した。

そして外に遊びに行く初日。

いつもは本を入れるためのカバンを持たずの初めての外出。ハンカチ片手に涙する母と、それを抱きしめる父に見守られながら開けた扉。

さあ！ 一体どんな日常の物語が待っているのか！

そう意気揚々と外に一步踏み出し、いつもは図書館と本屋に行くために右に曲がる道を直進し川を田指す。

様々な漫画に出てくる「河原」

不良同士が殴り合いの後に友情を深めあつたり、悩みを持つ人が土手に座り友人に打ち明けたりする言わば名所というものを実際に見たいと思つたからだ。

町の人々は活気があり、自分と同年代の子達は元気に走り回つている。

道行く人々、行き交う車

肌を撫でる風、眩しい太陽、周りの喧騒、焼き鳥屋から流れてくる香ばしい香り

それ一つ一つが物語

そしてこれが俺の日常の物語

目や耳だけを通してではなく体すべてを使って読む物語に俺はすぐ
に夢中になった。

それと同時に、今までなぜ外に出なかつたのかという後悔が生まれる

まだ家を出て五分も経っていないにも関わらず、気分は最高潮。

河原に行けばどんな素晴らしい物語が待っているのだろう。

さあ、次の角を曲がれば田舎の河原だ！

期待に踊る胸を抑え曲がり角を曲がり、まず田に入ったのは

「川神流……は使わなくていいか、適当右ほーんち

キキーツ！

ドオオオオオン！

パラパラ

歩道に飛び出した猫

急ブレーキをかけるトライック

そして

それを素手で止める男性だった

「は？」

そこで俺は初めて知った

俺の住む物語のジャンルは日常では無かったこと。

幼少期編 第一話

「…………ツハ」

目の前の光景に呆然としていた俺が現実に戻るために要した時間は数十秒。

それが早いか遅いかは分からぬが、今のセリフが間抜けなものだということとは確かだろ？

「危なかつたなあ、オイ、 つてやめろつて舐めんじゃねえよ」

猫に顔を舐められている男性を尻目に、先ほどの状況を思い返す

俺が曲がり角を曲がつたのと同時、猫が道に それもトラックの目の前に飛び出したのだ。

直後にクラクションと急ブレーキの甲高い音が鳴り響き、道行く人が何事かとトラックの方へと目を向けていた。

それがいけなかつた。

猫は突然の爆音と迫りくるトラックを見てその場で足を止めてしまったのだ。

十分な減速が出来ていないとトラックが猫にぶつかれば、どうなるかは一瞬で想像できる。

物語だつたら主人公が飛び出して猫を抱き上げ、間一髪トラックから助け出すという場面だろう。しかし、ここは現実の世界。

既に猫は轢かれる直前で、トラックと猫の近くには人一人居なかつた。

俺は反射的に猫を助けようとして、走り出そうとしたが距離は20m以上。間に合うわけがない。

周囲にいた子連れの親は咄嗟に子供が見えないように子供の口を塞いだり、一人で歩いていた会社員風の女性は自分の手を口に当て叫び声をあげる直前だつた。

駄目か

そう俺が諦め、目を逸らそうとした時

「しゃあねえな・・・つたく面倒臭え」

目を逸らした先

無精髭を生やし、灰色のシャツに黒いジーンズを穿いた中年一步手前といつた年齢の男性は、片手にスーパーの袋を持ち空いた手で頭をボリボリと搔きながら、心底面倒臭そうな声をあげていた。

面倒臭いと言つたのは事故の現場出くわした事が、それとも別の事に對してか？

そんな疑問が俺に浮かぶよりも早く、男性はスーパーの袋を地面に置き

次の瞬間

一歩踏み出すと同時、男性は一陣の風と共にその場から消えた。

いや、田につきやすい黒系の服のお蔭で影だけはとらえることが出来た。

男性の影は人間が出せる限界速度を大きく超えた速さで硬直している猫とトラックの間に割つて入り

そして

「川神流・・・は使わなくていいか。適当右ほーんち

そんなやる氣のない掛け声とともに繰り出された右ストレートがトラックに当たり

ドオオオオオン！

つという爆音と共にトラックが強制的に停止した。

回想終了

やはり何かがおかしい、物理法則どこにいった？帰つてこい。
いや、俺は物理法則に詳しいわけじゃないけど今のが普通じゃない
つて事くらいは分かる。

20mの距離を一秒かからず移動する？おめでとう、多分世界新記
録だ

トラックを一步も動かず片手で受け止める？多分陸上生物初の快挙
だ。

改めてみるとトラックは四トントラック。
しかも赤信号、皆で渡れば怖くないと思つてる小学生1ダースは軽
くまとめて吹き飛ばしそうな速度だった。（法定速度は守つていた
(が)

「お~おい、手の甲擦り剥けちゃったよ
舐めんな。猫は恩返しする生物じゃねえのかよ」
いてて、滲みるから

そんな俺の混乱を余所に混乱の原因である他の男性は猫と戯れてい
た。
トラックを止めたことに對して、それが当然といった様子だ。

ちなみに他の人たちの反応は 良かつた、周囲も呆然としている。子供の田を塞いでいた親は、既に子供が自分の手を振りほどいていることに気づかずあんぐりと口を開け、会社員風の女性は叫び声をあげる直前の姿勢で硬直していた。

これが普通じゃないのはこの場共通の認識らし

「何だ、川神院か」

what?

何納得していらっしゃるんですか会社員風のお姉さん

「川神院ね」

子連れのお母さん、なぜそんな当たり前のよつたな反応をしているんですか？

「川神院だー！」

少年　　いや俺と同じ年くらいか。

それはともかくなぜそんなヒーローに会つたみたいな顔で見てるんですけど　いや、猫救つたヒーローだけどさ。

会社員風お姉さんの言葉を皮切りに、周囲の動搖が收まり

「よくやつた兄ちゃん！」

「キャー、ステキー！」

やがて歓声に変わつていつた

「おいおい、おじさんすっごい良い人みたいに思われてんじゃん
ってこんなことしてると場合じやなかつた」

居心地の悪さうに身を震わせた男性は歓声に応えることなく、猫を地面に下した男性は未だ状況に追いつけずにいた俺の所に戻りスープーの袋を拾い上げると

「坊主、お前面白いな」

「え？」

俺に向かつて一言言つて、逃げるよつてひきだつて行つた。

そこから先の事はよく覚えていない。

呆然とした俺の頭からは、当初の目的会つた「河原を見る」という事などスッポリ抜け落ち

「ただいまー」

帰巣本能に従つた俺は、気づけば家にたどり着いていた。

陽の傾き具合からして家を出てから数時間といったところ。それほど街を無意識に彷徨い良く帰つてこれたものだと自分ながら思つ。

「おかえり」

扉を開けるとそこにはやや緊張氣味の母さんが立つていた。まさか俺が帰つてくるまでずっと待つっていたのだろうか?

廊下の奥を見れば、俺の声を聞きつけた父さんがやつてくるところだった。

「ね、ねえ、悟。外は楽しかった」

恐る恐ると言つた感じで母さんが訪ねてくる。

正直に「最初の五分以外は全く覚えていない」なんてことが言えるわけなく。

「うそ、楽しかったよ」

と笑顔で言つ。

別に嘘ではない。最初の五分間は楽しかったのは確かだ。

「やべ、良かった・・・」

それを聞いた母さんは安心したように胸を撫で下ろし、父さんも満足したようによかつたよかつた、と頷いていた

「とにかく父さん、母さん」

だからこんな質問をくるのは本当はヤメテおきたいけれど、せざにはいられなかつた。

「時速40kmで走つてくのトラックを素手で止めるつて、普通だと思つ?」

父さんも母さんも困惑したよひに顔を見合わせた。

「それは、オモチャじゃなくて本物のトラックひとつとか?」

聞き返す父さんに、「それも四ヶトラック」と付け加え反応を伺つ。益々困惑した風の父さんは数秒経つと、俺の肩に両手を置きしゃがんで田線を合わせ

「いいか悟、普通の人にはそんな事は出来ない」

絶対に、とそう断言した。

「そ、そうだよね！」

俺は思わず弾かれたよつて顔をあげる。

「ああ、そうだ」

と念を押す父さんの言葉に胸のつかえが取れた気がした。そして確信した。

結論、あれは夢だ。白昼夢を見たに違いない。
もしくは集団幻覚。そうだ、そうに違いない。「KAWAKAMI
IN」はきっとその幻覚症状の名称の類だらう。

そもそも物理法則に真正面から喧嘩売るアレを現実と思ったのが間違いだつ 「そんな事出来るのは鉄心さんくらいいだりつ」 なんですかと？

「あと、釈迦堂さんくらしかしね」

頬に手を当て思い出すよつて母さん。

今一人はなんと言つた？

「つまり、普通じやない人なら・・・」

「ああ、の人たちくらいならトラック位止められるだらうなつて悟、どに行くんだ？」

トライック位と来ましたか。
ヨロシチクシヨウ。
ならダンプカーまでなら止められんのか

「悟? もつぐい飯作るわよー」

引き留めようと/orする一人の間をすり抜けて一階にある自室へと向かい、ドアと窓のカギをかけてカーテンを全て閉める。枕元に何冊も積み上げられた本を丁寧にどかして、近所迷惑を考えた俺は布団を頭までかぶり

精一杯叫んだ

幼少期編 第一話（後書き）

酷い文だろ？信じられるか、こんな文書くのに四時間かかったんだ
ぜ？

どうも、初めてまして息抜きと言います

平和な日常を田舎して を読んでいただきありがとうございました

^ ^

プロローグに前書き後書きを入れ忘れていたのでこれが初めての後
書きになりました

映像として頭に浮かぶのですが、それを文字にするのがここまで難
しいとは・・・
少しずつ上達していきたいです。

時たまサブタイトルに出でくる「表」「裏」そのままの意味。
「表」で、「裏」があったころ一方「裏」ではといった感じです。

釈迦堂は、スーパーのコンビニ袋片手に一人歩いていた。

鋭い目つきに野獣のような雰囲気、これで黒いスーツを着ていればどう見てもヤのつく自由業の方。

少なくとも彼を見て、誰も彼がかの高名な川神院の師範代だとは思わないだろう。

普段目立つ事をあまり好まず、自分の風貌と自分に対する周囲の印象を自覚している釈迦堂は、気を抑え、周囲に溶け込むように行動するのだが、やや不機嫌であつた釈迦堂は自分でも気づかない内に周囲に気を漏らしていた。

何故彼がやや不機嫌なのかといつと、彼の教え子である百代が新しい技を習得し、それに対する「」褒美にアイスを要求してきたのが始まりだつた。

面倒くさいと最初は断つていた釈迦堂だつたが、

「なあーいいだろー師範代、ちゃんと技習得したんだからアイス下さいよー」

「わーつたから服離せ！伸びちまうだろ？が

といった感じに5分経つてもめげずに要求し続ける百代についに折れ、渋々ながらも買いに行くことにしたのだった。

何だかんだ言つても、自分の事を慕う数少ない教え子（唯一といつてもいい）の百代には釈迦堂も甘かったのである。

とは言つても、そんな子供の我儘くらいで機嫌を悪くするほど糺^ミ堂も大人げなくはない。

指定されたアイスがコンビニには無く、適當なアイスを買おうとするが文句を言う百代がすぐに頭に浮んだ糺^ミ堂は、他のコンビニを数店回るがそこにもなく、懶々スーパーまで買いに行つたがそこにもなく、半ば意地になり川神流高速移動法を使用してまで駅前のデパートに行き、ようやく見つけたのである。

教え子には寛容でもアイスには大人げない糺^ミ堂であつた。不機嫌さを感じ取つた人たちはそそくさと道を空けているが、その事に気づかず糺^ミ堂は歩く。

そんな彼が事件に遭遇したのは、人が疎らになり川神院まであと数分の河原近くの道路でのことだった。

事件といつても、猫がトラックに轢かれそう、といつ糺^ミ堂にひとつは割とどうでもいいような事だつたのだが

「しゃあねえな・・・つたく面倒臭え」

助けなかつたことが後で鉄心やルー辺りに知られたら、色々と面倒だ。少なくともまた川神院の心構えとやらを一から教え込まれるのは確実。

助ける労力と助けなかつた時のリスクの天秤が前者に傾き、尚且つ見捨てる程非情では無かつた糺^ミ堂はスーパーの袋を地面に置き、氣を足に溜め

「ほつ」

軽く息を吐くと共に踏み出し、常人には影さえ掴めぬ速度でトラックの前に移動した。

(さて、どうするか)

四七 トラックが目の前に迫っているにも関わらず、糺迦堂に焦りはない。

ノンビリと構えながら猫を助ける方法を模索し

(まあ、力尽くで止めれば問題ないか)

一番簡単かつ手っ取り早い方法を選択する。

「川神流・・・は使わなくていいか。適当右ぱーんち

気合いの無い声とは裏腹に氣の籠つた拳をトラックに叩きつける。拳はトラックにめり込み、直後に金属が潰れる鈍い音とトラック同士がぶつかり合った様な激しい音が響いた。

突然の強い衝撃から運転手を守るためにエアバックが作動し、トラックの後輪は大きく浮き上がらせながらも停止する。

「つと、こんなもんか」

猫に怪我なし、トラックは見た目は酷いが運転手は無事。

まあ悪くはない成果だろうと糺迦堂は満足しながらトラックを止めた衝撃でアスファルトに埋まつた足を引き抜く。

「俺が車をお糺迦にする・・・つと、つまんねえ事考えてる場合じゃなかつたな」

百代に聞かれたら間違いなく笑われた上に数日はからかわれる。
そんな事を思いながら未だ硬直している猫の抱き上げて怪我が無い
のを確認する。

「危なかつたなあ、オイ、 つてやめろつて舐めんじゃねえよ」

恩人に対する礼なのか、猫は釈迦堂の顔を舐める。

猫が好きな人にとっては嬉しい行為だが、猫に対してそんな感情を持つていらない釈迦堂にはただうつとおしいだけだ。

舌を突き出して顔を舐めようとする猫を遠ざけると、猫は納得いかないようジタバタともがいていたが、やがて大人しくなった。そこで釈迦堂は自分の手の甲が赤くなっていることに気づいた。十分に気を込めていなかつたのが原因だらう、流石にトランクを舐めすぎたか、と溜息をつく。

「おいおい、手の甲擦り剥けちゃつたよ いてて、滲みるから舐めんな。猫は恩返しする生物じやねえのかよ」

傷口への視線に気づいた猫がそこを重点的に舐めるのに、いつそ放り投げてやろうか? という考えが浮かぶが、行動を起こすよりも早く、釈迦堂はそこで自分に賞賛の声がかけられていることに気付いた。

「おいおい、おじさんすつゞい良い人みたいに思われてんじやん
つてこんなことしてる場合じやなかつた」

周りを見れば結構な人数が集まっていた。あれだけ大きな音を出したのだから当然のことだ。

別に気分が悪い訳ではないが、普段は周囲からは賞賛ではなくむしろ非難される事（特に同僚の師範代とか）の方が多い釈迦堂にとってこの状況は落ち着かないものだ。

一刻も早くこの場から去りたい釈迦堂は、半ば落とすように抱き上げていた猫をその場に下ろした後アイスを回収し

「坊主、お前面白いな」

「え？」

呆然とする少年にそう言い残し去つていった。

川神院まであと一分もかからない距離。

顔を上げれば既に川神院の門が見える距離まで来たが、釈迦堂は顔を伏せ、先ほどの事を思い返していた。

それは猫を助けた事でもなければトラックを止めた事でもなく、自分が最後に声をかけた少年の事。

（俺の勘違いじゃなきゃあ、あの坊主　　）

「師範代一遅いですよー！」

とそこで釈迦堂は自分にかける聞き慣れた声に思考を中断し顔を上

げると、そこには川神院の門の前で腕を組む少女、百代の姿があった。

アイスが待ち切れずに門の前で待っていた様だ。手をブンブンと振りながら催促するように名前を呼ぶ百代。

その距離は大体20m程。

「分かった分かった、今すぐ行くから待つてろ」

釈迦堂は、猫を助けた時と同じ様に足に気を溜めて一瞬で百代の前まで移動する。

「溶けないウチに冷蔵庫に入れとけ」

おお、と感心したように目を丸めた百代は、「ほれ」と釈迦堂が差し出した袋をすぐさま奪い取る様に受け取り、礼を言いながら笑みを浮かべる。

「おお、一ひとつもあるぞ!」

「一ひとつとも食うんじゃない、一つは俺んだからな」

ブーツと文句を言しながらも嬉しそうな百代と一緒に門をくぐり川神院へと入った釈迦堂は、ふと思いついたように

「せうじや百代、一つ聞きたい事があんだが

「何ですかー?」

冷蔵庫へと急ぐ百代を呼び止め、振り返る百代に一つの質問を投げ

かける。

「門の前で使つた縮地、お前俺を田で追えたか？」

「いくら私が天才ぱーふえくと美少女でも流石にまだあの速さを田で追うのは難しいぞ。精々影を捉える位です」

「そりが、呼び止めて悪かつたな」

正直な答えに満足し、去つて行く百代を見送りながら糺迦堂は口の端を吊り上げる。

「あの坊主、良い目持つてんじゃねえか。しかも雰囲氣からして鍛錬なんざしてねえ・・・。育て方次第じゃ化けるか？」

なんだあこの国は、鉄の娘や九鬼の娘と言い、次の世代は怪物が盛り沢山じゃねえか　　楽しくなつてきやがった

まだ卵だけどな、と付け加える糺迦堂の顔は野獸のよつこ、しかし田は子供のように無邪気に輝いていた。

ちなみにその後、トラック一台を壊した事で鉄心とルーの二人から
説教を受けた釈迦堂は

「普通に猫抱えて避けりや 良かつた」

と後悔する事になった。

以上釈迦堂視点をお送りしました。

この作品の目的の一つは、原作のちょい悪な男メンバーを最終的に
「さんかつけー！」にすることです。

釈迦堂さんや竜兵等を既にかつけーと思つ方は、男前な麻呂を『』期
待ください。誰得かつて？俺得です。

幼少期百代の口調がイマイチ掴めない・・・
ので敬語とタメ口の入り混じった感じにしてみました。子供には結構
あるかも、という作者の勝手な想像です。

これだけ見ると主人公が四天王クラスに成長しそうですが、なんあ
事はありません。

マルさんより少し強い程度にする予定です。十分すぎますが。

自分の中の常識、それが他の人には当てはまらないと知った時、人はどういう反応をするのだろうか。

間違っているのは周りで正しいのは自分、と己を正当化するのか、それともそれとは逆に自分が間違っていると認め、周囲の常識に合わせようとするのか。

少なくとも悟は、前者を選ぶほど自分に絶対的な自信がある訳無く、かと言つて後者を選ぶほど自分に自信がない訳でもないし自分の積み上げてきた人生観を急に変える度胸もなかつた。

正直、今まで外にも出ず年中本を読み漁つていた六歳児に周囲が異常だ、と言える常識と人生観があるかと突っ込まれそうではあるが、今の悟にはそんなことを気にする余裕がなかつた。

そもそも、所詮物語はフィクションの世界。

フィクションで培つた自分の常識と世間の常識にある程度の差異あるだろうと自覚していた悟は、様々な所を見て差異があれば順次調整しようとしていたのだが。

「ありえねえよ、何だよ『適当ばーんちwww』って、『擦り剥けちやつた』じゃねーよ、普通に死ぬか奇跡起きても瀕死だろおい、周りも何納得してんだよ『川神院なら仕方ない』?仕方なくねーよ。そんなセリフで物理法則の異常許容してんじゃねーよ。動物の都皆でやるうと思ってたのに他の奴ら全員クリハンやってた位ショックだよ。ジャンルどころか持つてるゲーム機からして違うじやん。でもこの場合俺の方が非常識なのか?そもそも常識って何なんだよチクショウ」

調整どころか改造しないといけないレベルの差異を田の辺たりにした悟が取った行動はシンプル。

「やうだよ、これだよコレコレ、コレが物理法則だよ。子供助けようとして車に轢かれたら普通に死ぬよ。あれ？でも主人公生き返った後探偵やってるぞ？まあいいや」

自分の殻に閉じ籠もる事だつた。

両親から衝撃の事実を聞いた後、部屋に鍵をかけて引き籠つてから一晩。悟は両親が何度も声をかけても一切の返事をせず、一晩中枕元の小さいランプだけを点灯し手当たり次第に本を読み漁っていた。その量なんと34冊（一冊平均500ページ）。どれだけ一心不乱に読んでいたかが分かる。

ともあれ、流石に一晩が経ち新たに陽が昇つてくる頃には混乱も大部分落ち着きを見せ、今の自分を客観的に見る程度の余裕が生まれていた。

ベッドからゆっくりと起き上った悟は窓を開け、新鮮な空気を深呼吸で肺一杯に取り入れ気分を整え、取りあえずは今後の方針を決めなくてはいけない、と体を伸ばしながら考える。

週の半分は外に出るという両親との約束は今さら破りたくない。かといって、外に出かけたときに先日のような事を田の辺たりにして、今度は落ち着いていられるという保証も悟にはなかつた。

「おーけいおーけい、取りあえずあれが現実だつたのは認めよう。まずはそこからだ。確かにあの人はトラックを止めたし、その所為で負つた傷は擦り傷だけだつた。

あんなビックリ人間みたいな真似は可能。でも昨日の父さんの言い方からするとそんな事出来るのは極一部の人間。そして川神院とやらにはそれを出来る人間が最低でも二人居る。けど認めたところあんなビックリ人間ショーをまた見せられたら昨晩みたいになるのはほぼ確実だ」

結論

川神院には絶対に近づかないようにする。これが悟の脳内会議で満場一致して可決されたことだつた。

とは言つても川神市に住む以上は死ぬまで近づかない、というのは難しい。

だから一年間だけ絶対に近寄らないようにし、それまでに先日のような超常現象に対して耐性をつける。

これなら実現可能なレベルだろ、と自分に対してひとまづの結論を導き出した悟は、

「流石にお腹空いたな。そういうえば昨日の晩から何も食べてないやこれ以上両親を心配させないためにも一度部屋から出るべきだらつトリビングに行くことにした。

「多分母さんをまた泣かせちゃったかなあ・・・」

漂つてくる肉が焼ける香ばしい匂いに誘われながら、少々バツの悪

かつた悟は気づかれないようにソロソロとコンビングを覗く。

悟の母は台所に向かい朝ごはんを作っていた。テーブルの上にはサラダが簡単に盛り付けられた器、トーストとその横に盛り付けられたスクランブルエッグの皿が3組ずつ。

ちゃんと自分の分は出来ているようだ。後はベーコンが焼ければ完成。いいタイミングで来たものだ。

そう思いながら悟は父の姿を探すと、悟の父はソファーに座りながら携帯電話で喋っていた。

「はい、では午前中でそちらに向いますのでよろしくお願ひします」と悟、おはよつ

「おはよつ」

丁度話が終わり、携帯をしまう父と田が合い挨拶を交わす。突然声を掛けられたことに少し驚いてしまった悟だったが、スムーズに返せたことに安堵する。

悟の父は無言で悟に近づくと、頭を一度だけクシャリと撫でテーブルに座つて妻の作る料理を待つた。

「ああ、悟起きたのね。おはよつ」

「うそ、おはよつ」

悟達の声に悟の母も気付き声を掛けてくる。。

目を少し充血させていた母に悟は胸がチクリと痛むのを感じながら、父と同じように挨拶を交わす。

悟の母はトーストの横に程よく良い色に焼けたベーコンを盛り付けると悟を手招きし、自分も席に着いた。

悟も席に着くと、一晩ぶりの家族そろっての食事が始まる。

悟の父も母も昨日の事について聞くことはせず、それが悟にとってはありがたかった。

父は仕事先であつた出来事を話し、母は少し心配そうに悟の方を時折チラチラと見ながらも父の話を聞いていた。

そんな一人を意識から外しながら、空腹だった悟は夢中でベーコンに噛り付いていた。

最終的にはトーストを4枚、ベーコンとスクランブルエッグを2回御代わりするという6歳児にとっては少々多い量を食べた悟は満足したように箸をおいた。

その時には食事前にあつた少々のぎこちなさも無くなり、いつも通りの識丈家に戻っていた。

母の食器洗いの手伝いを終えた悟は、一度仮眠を取ろうと部屋に戻る事にした。

なにせ一晩中本を読んでいたのだ、満腹感も合わせ幼い悟の体は少しでも気を抜けばその場で寝てしまいそうなほど睡眠を欲していた。

「悟、今日は外に出るのか？」

半分意識が朦朧としながらもリビングから出ようとするが、父に呼び止められた悟は眠いと言えど無視する訳にも行かず振り返る。

「うん、今日も外で遊んでくる

そつか、と頷いた悟の父はチラリと妻の方を見て一言

「なら、今日は皆で出掛けないか？」

「いいよ」

特に悩むことなく悟は了承した。

悟には家族でどこかに出かけたという覚えは余りない。（もちろん家に引き籠りずっと本を読んでいた悟が原因である）
久々に家族全員でどこかに出かける機会が出来たのだ。悟には行かないという選択肢はなかった。

それに、家族でどこかに出かけるとしたら遊園地、水族館といった場所や公園。

河原は昨日自分が一晩引き籠る原因になつた場所だから恐らくは候補に挙がっていないだろうし、久々の外出だから遠出する可能性も高い。

川神院の場所が分からぬ悟は、下手に一人で彷徨つて超常現象にエンカウントするよりかは遙かに良いだらう、という考えもはあつたのだ

「それで、何処に行くの？」

が、しかし

「川神院だ」

世の中そんなに甘くないのである。

s i d e 悟

年月を感じる立派な木の門の向こうから聞こえてくる元氣で楽しそうな声が響いてくる。

俺の頭より高く設置された看板には、これだけで値打ち物なんじゃないか、といつほどの達筆な文字で、「川神院」と書かれていた。

そうこうつてやつてしまつました川神院。

「帰りたい・・・眠いし・・・」

来るのを不本意といつヘルではなく断固拒否したかったのだが、珍しく父さんが力強くという外道な方法を取ったため7割方強制的に連れてこられたのである。

残りの二割?母さんの泣き落としですよ。アレほんとに卑怯。

「父さん、もう逃げないからコレ解いてよ」

自分の胸にグルグルに巻かれたロープを指さす。

最初、川神院という単語を聞いた時反射的に全力で逃げようとしたのだがソファーに座っていた父さんに一瞬で回り込まれ捕まってしまい、それでも逃走しようとした結果がコレである。

その回り込むスピードは先日の男性に迫るものだったと書いておこう。

新事実 父も人外の存在でした

ここまで来るときに父の背中で半分寝ながら説明をされたのだが、

何でも川神院とは川神流という武術を学ぶための場所で、その歴史は深く今では武術の総本山とも言われているらしい。

そりやトラック片手で止める人外が最低一人も居る道場が「ゴロゴロあつてたまるか！」というのが素直な感想だが。

ちなみに父と母も昔この川神院で教えを受けっていて、二人が出会った場所もあるとか。

となると母さんも人外である可能性が高い。普段の姿を見ているとしてもそんには思えないが・・・

「ダメだ、少なくとも門に入るまでは解かない」

「さいですか・・・」

ロープをグイグイ引っ張りながら笑顔で否定する父さん。もう覚悟を決めるしかないようだ。

つか子供をロープで縛つて引きずるとか児童虐待にならないか？よく通報されなかつたな　　あ、川神市だからか

「それにしても久しぶりだな」

「ええ、鉄心さん達には良く会つてたけど、ここに来ることは余りなかつたものね」

俺が覚えていないだけで、何度か家族全員でここに来たことがあるらしいが、俺が引き籠るようになつてからは来ていらないんだとか。思い出に浸りながら門をくぐる父さん、母さんとそれに引きずられる俺

「ほっほ、よく来たの武君、つぐみ君」

そんな俺たちを出迎えてくれたのは、杖をつき白い髪を立派に蓄えた老人だった。

父さんと母さんの名を呼びながら微笑む姿は息子夫婦と久々に再会した親のようにも見える。知らない人が俺たちを見れば本当に家族と勘違いしそうだ。

「お久しぶりです、先生」

父さんと母さんも嬉しそうな顔で老人と握手をしながら挨拶を交わし、俺を（ロープで）自分の一步前まで引っ張る。挨拶をしろということだろうが、なんだろう、最近父さんからの扱いが雑になつてゐる気がする。

「初めまして、識丈悟です」

「ほっほ、初めまして、と言いたい所じやが悟君とは何度か会つたことがあるんじやよ？ 悟君が今より小さいころにな」

お辞儀をする俺の頭を撫でながら笑う老人。

少しくすぐつたいが嫌な感じはしない。父さんにもよく頭を撫でられるが、父さんの力強いのと比べると優しい感じだった。

父さんと母さんの両親は既に亡くなつていて、祖父というものがどういうものかは本でしか見たことがなかつたが、きっと居ればこんな感じなのだろう。

しかし、油断してはいけない。

人外魔境（予想）の川神院に居て人外であつた父が先生と呼ぶこの老人が人外でない訳がないのだ。

「流石にこの人がトラックを止められる程の人物であるとは思えないが

「と、自己紹介がまだじゃったの。川神院最高責任者の川神 鉄心
じゃ」

そんな事はなかつたようだ。

差し出された手を握り返した状態で、思わず固まる。
この人が父さんが最初に引き合いに出したトラックを素手で止めら
れる人一号かよ。

「ほつほつビッグしたかの？」

「い、いえ。よろしくお願ひします」

半分フリーズした俺を余所に鉄心さんは父さんと一つ一つ言葉を交
わすと、道場の方へ案内すると言い先ほどから声の聞こえる方へと
歩き出した。

それに付いていく両親に、これ以上は引きずられたくないので俺も
ついていく。

しばらく歩いているとある建物の前で立ち止まつた。武家屋敷のよ
うな大きな建物だ。

「ここが川神院の道場じゃ。ここに多くの者達が修練を積んでおる

「おおー」

自分で中で思い描いていた通りの立派な道場に思わず声が漏れる。

靴を脱ぎ道場の廊下に上ると、さつきより大きくなつた掛け声の他に重いものを床に叩きつける音が振動と一緒に聞こえてくる。ほどなくして騒音と言つていいレベルの音が聞こえてくる扉の前に着くと、鉄心さんが扉を開けて中に招き入れてくれた。

中に入ると、そこは建物の中とは思えないほど広い空間だった。東京ドーム何個分という表現をよく聞くが、その四分の一はありそうだ。

そこでは多くの道着を来た人たちがそこで練習していた。

一人ひとりの掛け声が重なり合い部屋全体を震わせ、地面を碎けるのではと思うほど踏み込みに木張りの床が悲鳴を上げる。

「ツー！」

氣迫といった目に見えないものが肌で感じながら、余りの迫力に息を呑む。

一人一人が真剣に修練に取り組んでいて急げている人は一人も居ず、文字通り死ぬ気で全員が鍛錬をしていた。これが武術の総本山の川神院、と目の前の光景に釘付けになる。

そんな部屋の中で一人だけ違和感を感じる人物がいた。

女の子だ。

それも俺と同じくらいの歳の女の子が自分の身長の倍、年齢に至っては三倍、四倍はありそうな男性と向かい合っていたのだ。

男性でもあの女の子と同じくらいの歳の子は俺を除いてこの場に一人もいない。一番若くても高校生くらいだ。だから最初は自分の目を疑ってしまった。

二人はお互に礼をすると、3mくらいの距離まで離れ同じように構えた。

周りと同じように両者の目は真剣で、教えを受けているという生徒と先生といった雰囲気ではない。

組手というヤツだることは理解できたが、だからこそ父娘と言つてもいい程歳の離れた二人が本気で組手をする事に訳が分からなくなつた。

理解が追いつかずに一人の様子を静かに見守つていると、男性の方が動いた。

男性は3m程の距離を一息で詰め、気合の入った掛け声と共に少女に鋭い蹴りを放ち、それは一直線に女の子の側頭部に吸い込まれていいく。

あんなものが子供に当たつたら一たまりもない。

危ない！

そう思わず叫ぼうとした時だった。

ドオオオオオオオン！

と、喧騒入り混じる部屋に一段と大きな音が響き渡つた。

近くで爆発物が爆発した音でもなければ、昨日のよつにトランクを誰かが受け止めたわけでもない。

今の音は正真正銘、人が人に攻撃したことで発生した音だった。

気付けば女の子に蹴りかかっていた男性はその場から消え離れた壁に埋まりながら気絶し、そして女の子は拳を突き出した姿勢で静止していた。

何が起こったかは簡単。

蹴りが女の子に当たるよりも早く、女の子から突き出された正拳突きが男性に届いたのだ。

たつたそれだけだ。

それだけで男性は10m以上離れた壁まで吹き飛ばされた。

目の前で起きたことが信じられなかつた。ある意味素手でトランクを止める事より衝撃的な光景だ。

「ありがとうございました」

他の門下生に壁から救出されている男性に向かつて礼をした女の子は、こちらの視線に気づいたように目を向けた。
俺と女の子の視線が交差する

これがこの世界一の非常識であり理不尽を誇る、川神百代との初めての出会いだった。

幼少期編 第一話（後書き）

といった感じでお送りした第一話「表」でした。

キリギリスが分からなかつたので気にせず書いていたらいつもの倍くらいの長さになつっていた。

でもこれくらいの長さの方がいいのかな？

という訳で今回は百代との初邂逅です。

4話掛けてようやくここまでこれました。もつとテンポよくいきたいですね。

残念ながら、現段階で百代にフラグを立てる事は予定しておりません。

あらすじにハーレムになるかも？と書いておきながら、ヒロイン入りするかどうかは完全に今後の気分しだいです。

正直に言つとメインヒロインは既に決まつてるのでその子一本に絞るか、それに一人か二人加えるか悩んでいます。

他の作者様の作品を読んだりすると「ハーレム最高ー！」とか思つていたのですが、いざ自分で書いてみると余り氣乗りしなくて自分でも驚きます。

やつぱり大和ヒロインのカップリングが好きだからですね。

でもこれだけは断言します。京は大和の嫁。これは絶対。

最後に今回の話の解説を一つほど。

・悟の両親

名前と容姿が全然思い浮かばなかつたので自分の大好きなゲームの主人公とヒロインから名前をお借りしました。
結構有名なゲームなので知つてゐる人は多いと思います。ヒントはお母さんの元の人の声と百代の声はソックリです。お父さんの方の声はモロと因縁がありそうな感じ。

・川神院道場

とても広く、東京ドームの四分の一程と書きましたが、実際はもつと狭いです。これは自宅と図書館くらいしか建物の内部を見た事のなかつた悟が実際の広さよりも広いと錯覚してしまつたということです。

図書館は結構広いと思いますが、障害物がない広い空間は悟にとって初めて見るものでした。実際は体育館くらいの大きさだと思つてください。

ちなみに他の建物には畠の道場など様々な練習場があります。

「やうだよ、これだよコレモン、コレが物理法則だよ。子供助けようとして車に轢かれたら普通に死ぬよ。あれ？でも生き返った後探偵やってるぞ？まあいいや」

「ぐすり、悟一鍵開けてよー。じゃないとお母さん泣いちゃうだよー」

既に泣きながら扉に縋り付く精神年齢が若干退行した妻に、返事をせず部屋に引き籠り明かりもつけずにずっと独り言を言い続ける息子。

「はあ～」

そんな一人を見ながら一家の大黒柱である武は溜息を吐いた。
いつも本ばかり読んで外に興味を持たない息子を説得して、週の半分は出掛けさせることを約束したのが一昨日。

これを機に少しでも外に興味を持つてくれればいいと考えての事だったが、その試みは初日で失敗してしまった。

なんでも悟は先日河原で人が車を片手で止める現場を目撃したらしいのだが、「それが普通か？」という問い合わせをして、それを行つたのは鉄心さん辺りだろうと思い「『あの人達なら』まあ普通だな」と答えてしまってからが大変。

昨日は夕食も食べずに寝た息子を心配し、朝起きたら隣に妻の姿が無かつたので様子を見にくればこの状況である。

普段クールな妻をここまで取り乱させる息子に少し嫉妬を覚え、まるで子供のようだと武は自嘲しながらも田の前の状況をどう打破しようか考える。

「いつそのこと扉を蹴り破り無理矢理外に連れ出す、といつ考えが武に浮かんだがかえって状況が悪化しそうなのですが」却下。無理に連れ出すよりは時間をかけて落ち着くまでは待った方が良いだろう。

そう考えた武はまずは妻を落ち着かせる」とから始めたことにした。

「落ち着けつぐみ」

「武い、悟が反抗期だよー」

肩に手を置き落ち着かせようと優しく声をかけると、つぐみは勢いよく振り返り武の腰に飛びかかるように抱き着いた。

「おー、よじよし」

抱き着いてくる妻を受け止め、子供をあやすように頭を撫でる武は「しばらべ話には何を言つても無駄だろー」と言つて、つぐみに食事の準備を頼む。

暫く渋つていたつぐみだったが、「多分話もお腹空かせていくだ」と武が付け加えるとと渋々とキッチンの方へと去つて行った。

「さて」

つぐみがリビングに行つたのを確認し、武は改めて扉に向かって合つた。

悟が何故引き籠っているかは大体の見当が武にはついていた。

今悟が引き籠もっている原因は自分が想像していた世界と現実とギャップだろう。

たまにいるのだ、他所からこの街に来て余りの非常識っぷりに混乱する人が。

そりや人が空を飛ばされたり水の上走ってる光景を見た田には、それが夢か自分の目の心配をするのが普通の反応だ。

でもそれは大抵大人であって子供、それも悟位の年齢ならすぐに受け入れる事が多いのだが。

「悟、そこらの大人より大人びてるからなあ～」

様々な物語を読み、様々な人、様々な価値観をフィクションとはいえ学び、体は子供頭脳は大人！とまではいかなくとも中学生位の常識を持っていた悟はすぐに受け入れることが出来なかつた。

「こんな事なら川神市についてもつと説明しておくんだった」

と武は自分の短慮に後悔する。

川神院のビックリ人間ショーを見れば外への興味が増すのではないが、とも考えていたのだが今回は完全に逆効果だ。

「はあ～、駄目だ何も思いつかん」

打開策がいつまでたつても思い浮かばないので、仕方なく武もリビングに向かうこととした。

「なんかいい方法ないもんかな？」

「ソファーに倒れこむよひに座りながら、卵を溶いていじるつぐみへと視線を向ける。

「あなたが高校生の時に川神市に来たときはすぐに馴染んだのにね」「そりゃ俺は頭の柔軟性が売りですから、にしても我が息子ながら頭が固い・・・つぐみに似たんじゃないのか？」

「どう見ても武に似たわ。頑固な所とかソックリ」

つぐみが卵を溶くのを中断し、クスクスと笑うと武は拗ねたよひに「つらせ」と言い再び息子を部屋から出す方法を模索する。

武が川神市に来たのは9年前の高校入学の時だった。
当時は体を鍛える目的で川神院の門を叩いたのだが、院長である鉄心や当時は師範代候補だった釈迦堂には武も最初は自分の目を疑つたほどだ。

しかしその日に数時間の体験を受け、入門を決めて帰宅する頃には完全に順応していたのだが。

そんな自分の体験の元、息子なら自分のよひにすぐ慣れると思つたのがそもそも間違いだつた訳だ。

息子の性格を把握しきれなかつた自分の落ち度だと武は悔やむ。

「どうしようかしら？ ついえば、鉄心さんにお孫さん頼るし」

武の頭の中に活発な女の子の姿が浮かぶ。

「百代ちゃんか、あれは鉄心さん以上の武術家になるよ　　そうか、そういうえば悟と歳近かつたな」

「悟の一つ上よ。川神院とは近いから同じ小学校に行くでしょ。あの歳でもう中位の門下生と渡り合える百代ちゃん見たら悟いつながるかしぃっ。」

「学校で見かける度にあなたたち流石にマズイ。ところが面倒くわこーわ」

そもそも川神院と血祀は近いから昨日みたいなことを何度も叩撃する可能性も高い。
次から次へと出てくる問題点にゲンナリしながらも、武は解決策は何か無いかと考える。

「わかったこと川神院に預けりやおつかしら? なーんて

と血分でも駄目な手だとすぐに分かる事につぐみは笑う。

しかし

「それだ」

指をパチンと鳴らしながら武は考えもしなかったとバッと顔を上げた。

「非常識 慣れてしまえば 当たり前 b y 識丈武」

簡単な話だった。

常識といつ固定概念に捕らわれてるから駄目なのだ。

「どうせいつの非常識に放り込んで一度語の常識をぶち壊してしまえばいい」

ようやく納得できる解決策が出来た、と武は満足したようにソーファーに背中を預ける。

その時、タイミング良く一階の窓が開く音が聞こえていた。恤もよしやく立ち直りしき。

「やつと決まれば鉄心さんに連絡だな

と携帯を開く武。それに対してつぐみは心配そうな顔をするが、他に手も無いので武に任せたのだった。

幼少期編 第一話 裏（後書き）

といった感じにお送りした第一話「裏」でした。

前回がいつもの倍程の量になつた反動か今回はいつもの半分程度の量です。なので次の更新は明日にします。

普段は夜に書き上げて一晩寝て休んだ頭で見直して、おかしいなーと思うところを書き直してから投稿するのですが、今回は昼間のうちに一から書き始めて完成してしまつたのでいつもより内容が酷いかもしません。

いつも酷いじょん。って思う人はごめんなさい。
精進します。

次回はお待ちかね、主人公VS百代です

綺麗な子だ。

悟の前の少女を見て悟はそう思った。

自分と同じくらいの年齢の女の子だったら普通は可愛い、と言つべきだと思う。

しかし、彼女を見た瞬間真っ先に思ったのはそんな言葉だった。理由なんて分からぬ。彼女の整った顔立ちは勿論のことだが、身に纏う雰囲気といったよく分からぬ何かが悟にそう感じさせたのだ。

何故彼女が自分の事を真っ直ぐ見ているのか、悟はすぐには分からなかつたが、多分自分と同年齢の男の子が居るのが珍しいのだろうと考へる。

女の子　　百代は悟の顔をじみひくマジマジと見つめると、何かを思い出したよしな顔をし

「おー」

「

悟に向かつて声をかけよつとして

「何をしこりんじやあああああー！」

「ゴキンツ！」

といつ音と共に鉄心の拳骨が頭に炸裂した。

「痛うー」

頭を抑えながら百代は床にしゃがみ込む。

何やら人の頭が鳴らしてはいけないような音がしたが大丈夫だろ？
か？頭の傷より前に脳の方を心配したくなるような音だった。

と思いながら悟が周りを見回すと鍛錬をしていた他の人たちも全員
手を止め、その光景を見守っていた。

いたのだが

「これは、百代殿と鉄心殿の組手が見れるのでは？」

「おお、それは僥倖。しっかりと拝見させて頂ましょー」

「うー」数日は見ていなかつたからなあ、楽しみだ

ヒソヒソと話し合ひ門下生たちの顔には特に心配するような表情は
無い。

両親を見ると、一人とも見物するような目で見ており、どうやらこの
道場内で目の前の事に心配しているのは自分一人だと悟は気づい

た。

とそこで

「何すんだジジイイイイイイイイイ」

部屋を震わせるほどの大声を発しながら、涙目になつた百代がいきなり立ち上がり鉄心に殴りかかった。

先ほど組手で男性を吹き飛ばした時よりも遙かに早い突きだ。信じられないことに百代はアレでも手加減をしていたらしい。

しかしそれを鉄心はゆうゆうと片手で受け止め、空いた方の手で再び百代の頭目かけて拳を振り落す。

「道場を壊すなといつも言つてあるじゃらうー！」

「道場がモロいんだよー私のせいにするなジジイ！」

それを迎え撃つ様に繰り出された百代の拳と衝突した瞬間、広い道場内を突風が吹き荒れ、一人の居る場所を中心床がしなる音が伝わる。

それを見た門下生の多くは、少しまづいと感じたのか道場の外へと退避を始め、残った少数の者は道場の隅に固まり何やら小さくブツ

「ブツツぶやいたかと思つと

「「「波ツー！」」

といつ掛け声とともに、道場全体を薄く輝く壁が張り巡りされる。少しでも道場への負担を減らすために張られた結界だ。

そしてそんな事を知らず、今田何度田になるかも分からぬ思考停止状態に陥っている息子を引きずりながら、武はつぐみと共に結界を張つている門下生の所に移動する。

門下生のすぐそばまで来ると先ほどどの風が嘘のように止まる。結界を張つている門下生を守るための結界の中に入つたからだ。

鉄心と百代の一人が拳を打ち合わせるたびに大きな音と共に衝撃波と風が生まれ、それはどんどんと激しくなつていいく。

そんな突風の発生源を呆然と見ながら悟は少女と田を合わせたとき思わず高鳴った胸の鼓動などとうに忘れていた。

「それよりジジイ！ 昨日私のアイス勝手に食つただろー！」

「一つもあれば一つは儂の分じゃと思つじやうがー余つの方を食べた釈迦堂君に文句を言いなさいーむ、釈迦堂君の姿が朝から見えないのはそのせいー」

「隙アリツー！」

「ぬつー？甘いぞ百代」

子供のような言い合いをしながらも、残像が見えるほどの速さで打ち合ひつ一人を見た周囲の反応は三通り。

目の前で繰り広げられている戦闘に感嘆の息を漏らし田を奪われている者。

またか、と溜息を吐きながらも止める方法がないので成り行きを見守っている者。

そして我に返り、この場から一刻も早く逃げ出そうとロープを噛み千切ろうともがいでいる悟だった。

前歯奥歯糸切り歯。自分の持つすべての歯を使って悟はロープに噛り付く。

しかし、子供の顎の力で噛み千切れるような細さではなく、顎と歯茎が猛烈に痛む代償を払ったにしてはロープの表面を少し削る程度といつも細な結果に終わった。

噛み千切るのは無理と悟は判断し何か刃物は無いか、と周囲を見回すと壁に薙刀や刀が立てかけてあるが恐らくはレプリカだろうし、そもそも自分の手の届く場所ではないと諦める。

更に言えば、仮にロープを切れたとしても結界の外は恐らく人が吹き飛ぶほどの風だ。出口まで無事にたどり着けるとは限らない。

ロープからの脱出。一人の組手（？）を止める。

最低でもこの一つの条件を満たさなければここから逃げるのは不可能。

何か手は無いか、悟がそう思つた時だった。

「やーめーなーそーいー！」

百代と鉄心の間に緑色のジャージのよつなものを着た人物が割り込んだ。

その人物は再び突風を生み出そうとする直前の一人の拳を飛び蹴りで弾き、ぐるぐると回転しながら床に着地した。

あの一人の間に割り込める当たり、一般人ではないがそんなことは悟にはもはやどうでも良かつた。

水を差された一人は構えこそ解いてはいないものの、一先ず戦う手を止めそれにより突風は収まっている。

あの人物が誰にせよ脱出条件の一つはクリア。後の問題は自分に巻かれているロープのみ。

「鉄心さん、アナタまでムキになつてどうするんですか！」

「しかしのうルー君。最初に原因を作ったのは百代の方じやよ」

「子供みたいな言い訳をしないで下さい！周りを見てください、道場酷いことになりますよ！」

悟が両親に田を向けると、幸いにも武とつぐみは三人の方を見ていた悟が逃げようとしている事に気づいていない。

今こそが絶好のチャンス。

「何か手段は無いか。早くしないと俺の精神力が持たない。こんなマンガみたいな空間から脱出する方法は あつ」

とそこまで言いかけた武は自分の今言った言葉を反復し

「試してみる価値はあるか」

一つの方法を頭に思い浮かべた。

武とつぐみは田の前で言い争つて居る二人を静かに見ていた。

「全く、鉄心さんもルーさんも変わらないなあ

懐かしい光景だ、と武は田を細めながら呟く。

「ふふ、これであそこに釈迦堂さんが居れば

「

「状況が悪化するのは間違いないな

武とつぐみが川神院に居た頃にもこんな光景は何度も起こり、それを一人は目撃していた。

と言つてもいつもは武術に対する解釈の違いから糸迦堂とルー対立し、それを鉄心が仲裁に入るというもので今回は配役が違うが。

「分かつたルー君。反省しとるからもう許してくれんかのう」

「私も反省するからお説教は勘弁してください。耳にタコが出来そうだ」

鉄心と百代もルーのお説教の勢いに押され既に戦意を無くし、拳を収めている。この半分乱闘騒ぎもこれで終わりだらう。

そこでふと武は、そういうば息子はどんな顔をしているのだらうと考え、あることに気づいた。

先ほどまではたはずのロープから伝わってくる手だけが今ではないことに。

「まさか……」

振り返った武が目にしたのは想像通り、所々表面がボロボロになつているが切れている様子もなく、解かれてもいいロープ

そして

出口へと爆走する息子の姿だった。

s i d e 悟

出口に向かつて一直線にひたすら走る。

もつと抵抗しておけば良かつた、と心の中で後悔する。

女の子が自分の倍ありそうな成人男性吹き飛ばす？ ありえない。 昨日のトラック事件位ありえねえ。

道場の風景見て『これくらい頑張つて修練積めばトラックくらい止められるかなー』なんて少し納得してた五分前の俺ふざけんな。 どんなに頑張つても越えられないから限界つて言葉があんだよ。

しかも生身の拳と拳ぶつかり合つて風生まれるとか何処のバトル漫画だよ。 最近の少年誌でもそんなインフレしばらく起こつてねえよ。 しかも拳句の果てには結界張るとかどこのファンタジーだコノヤロイ。

それについても漫画で読んだ縄ぬけの術が実際に使えて助かつた。 読んだときには人間の体じや出来ねえよ！ って思つたけどやれば出来るもんだ。 お蔭で今体中滅茶苦茶痛いけど、ありがとう漫画家の先生。

「逃がすかあああ！」

背後から地獄の底から響くような唸り声が聞こえてくる。もしかしなくとも確実に父さんの声だ。

しかし、もう遅い。一度道場から出てしまえば廊下は避難した門下生が大勢いる。

いくら父さんが人外の速度で移動できても障害物が多ければそれも発揮できまい。そして俺は体が小さい分障害物の間を走りやすい。

「これは逃走ではない、自由を勝ち取るための闘争だ！」

どこかで聞いたようなセリフを叫びながら道場から転がり出す。突然飛び出してきた俺に気づいた数人の門下生が驚いたような顔をするが、それに構わず門下生の群れの中に飛び込んだ。思つたより狭いがこのくらいなら問題なく走れる。

「すまない！ 退いてくれ！」

後ろから聞こえる父さんの声はどんどん遠ざかっていく。ある程度距離を離したらどうとか部屋に飛び込んでやり過い!そつ。

そう思った時だった

「ええい、メンドクセエー！」

ダンッ

という音と周りがおお、とどよめく声が聞こえて振り返るとどこで
もない光景を目に入った。

「なつー壁を走ってるだとー?」

門下生にぶつからないように天井付近を走って追いかけてくる父さ
ん。

なんだこのホラーは。
人外ここに極まり。母さん、俺はもつあの人を人間と見れそうに
ありません。

しかしこの状況はマズイ。

父さんは完全にこっちの姿が見えるから部屋でやり過いすことは
出来ないし、かといって障害物のない場所に出てもすぐに追いつか
れる。

「どうする?」

そう考える間にも人の隙間から開けた空間が見えてきた。来るとき
に歩いてきた距離を考えると、この人垣から出ればすぐ出口だ。

逃げ場のない部屋か、すぐに追いつかれる外か
どちらを選ぶ。

「諦めてたまるかああああ

門下生の群れから出ると同時に全力の一歩を踏み出し靴なんて履いている余裕なんてない、と裸足で野外に飛び出す。着地すると、とがった石が足の裏に食い込み足に痛みが走るがこの際無視。

そして

両手両足を地面につきその場に急停止して振り返る。

振り返った先には俺を捕まえようと手を伸ばし、予想外の出来事に驚く父さんの姿があつた。

逃げる事も隠れることも出来ないなら、追いかける人を潰せばいい。

父さんの腕は先ほどの二人の打ち合いとまではいかずとも、俺には反応するだけで精いっぱいの速度だ。

しかし、いくら速い拳動でもそれが自分の目に見えるレベルでくるタイミングさえ分かつていれば防ぐ事は十分可能。

迫る腕を全力の力で弾き、体勢の崩れた父さんに飛びかかる。
狙うは顎。

こんな奇襲が通用するのは一度きり。だからこの一回で確実に短時間でも行動不能になんければいけない。

空中で体のバネを限界まで使い、渾身の力を込めて拳を突き出す。

しかし

「当たるかそんなもん」

父さんはそれを最低限の動きで避ける。

「予想通りだ」

拳を父さんの鼻先を空振りすると同時に開く。その中から出てくるのはさつき急停止するために手を地面についた時、握りしめておいた砂だ。

そもそも顎にクリーンヒットしたとしても子供の腕力で大人を、それも父さんをノックアウト出来るという保証は無い。だから本命はこっち。田を潰しても追いかけてくる事は出来なくなる筈。

「まだまだ甘え」

しかしそれも届かない。

既に体勢を立て直した父さんは、弾かれていない方の腕で田を完全にガードする。

結果砂は父さんの田には届かない。

囮は通用せず本命も届かなかつた。

この状況はマズイ

「これで終いか? さと

ふが! ?」

この手段だけは絶対に取りたくなかった。

父さんがその場に受け身も取らずに倒れこむ。

真っ青な顔は苦悶の表情で染まり口の端からは泡が溢れていた。

視界の隅では俺の鬼畜の行いに門下生までもが顔を青く染め、数人は自分の下腹部を押さえてまるで痛みが伝わっているかの様に悶えている。

そう、俺がやつたことは単純。

目潰しで視界を封じた俺は、無防備な父さんの股間を全力で蹴り上げたのだ。

「この技だけは使いたくなかった」

頬を涙が伝うのを感じる。

本命が届かなかつた場合の最終手段。

その威力や目の前の父さんが示すとおり、人外一人沈めるほどの威力だ。しかし、自分にも精神的なダメージ帰つてくるのが難点だ。自分にされた場合を想像し思わず身震いしながらも倒れた父さんに背中を向け。

「すまない、つぐみ。二人目は作れないかもしね」

父さんの悲痛な言葉から逃げる様に走り出した。

十分前の記憶を頼りに走っていると、ぼんくして正門が見えてきた。

何はともあれこれで自由だ。

最大の障害を乗り越えた俺の田の前に邪魔する物は何もない。

早く帰つて今度は川神院とは真逆の方向に出かけよう。まずは公園を探して同年代の子供を見つけて声をかけるのが良い。
田が落ちるまで楽しく遊んだあとは「また明日」って言いながら別れるんだ。そうやって少しずつ友達を増やしていく。
もしかしたら俺のように物語が好きな子がいるかもしない。お互いい好きな話を教え合ったり、語り合ったり出来たら最高だ。

想像すれば想像するほど明るい未来が見えてくる。

「おこ、

だから

「お前面白くな

そこを退いてくれませんかね？

お嬢さん

謝罪といつづけの言い訳。

前の話で「明日更新する」と書いておきながら更新できなくてすいませんでした。

夜中バイトから帰った時にはクタクタで、ソファーの上で目を瞑つたら次の日の朝になつていたという次第です。

そしてもう一つ。

同じく前の話で「次回は悟 VS 百代です」と書いておきながら結局そこまで行かず、なぜか父親 VS 悟になつてました。

楽しみにしていた人は本当にすいません。

さて、今回の話では悟の人外っぷりも結構見えてきたのではないかな、と思います。

作者自身もどうやってぐるぐると胸に巻かれたロープを切断や結び目を解かずにつか短時間で脱出したのか見当もつきません。少なくとも閑節外すべしいや抜けないのは確か。

悟が漫画で読んだ方法は、現実ではまず実践不可能なトンデモ理論です。そしてそれを実行した悟は間違いなく人外の道に片足突っ込んでいます。

次回あたりで周囲に悟の非常識っぷりが知れるかもしません。悟本人はまず気づきませんが

川神院の正門。

俺が後少しで自由を掴めそうなどころで、最後の最後でボスがやつてきた。

父さんがラスボスとしたら裏ボスってところか？

少女の4mほど近づいたところで立ち止まる。

どうする？

相手は女の子。無視して強引に抜けるか？

無理だ。

彼女の実力は先ほどの道場内的一件で分かつている。真正面から向かって抜けるのはほぼ不可能だろう。
かといって父さんにやつたように不意打ちして逃げるのも却下だ。
女の子相手に手を上げるのも俺の良心が絶対に許せない。

じゃあ一度院内に戻るか？絶対に嫌だ。折角出口まできたんだ。もうあそこには一秒も居たくない。

「すいません、そこ退いて貰えますか？」

だから俺に残された手は話しかける事しか残っていない。

父さんと違つて彼女は悟を捕まえる目的は無いはずだ。強引な手段を取つてまで引き留めようとはしない、と思いたい。

「百代だ」

「モモヨ? 了解つて意味ですか?」

「川神 百代、私の名前だ」

おやじですかね。

「百代さん？そこを退いてくれるとすつづい嬉しいんですけど」

「お前の名前は？」

「あのー・・・聞いてますか?」

「名前は？」

「えーうど・・・」

「なーまーえーはー?」

「・・・識丈 懇り申します」

駄目だ。」の御嬢さん話をお聞きになりやがらねえ。

これが噂の無限ループか
体験したのは初めてだけど二レモノ凄し
メンドクサイ。

「そうか、悟か。いい名前だな。両親に感謝しろよ！」

そりやどうせ。褒めるついでにそこ退いてくれたら最高なんですが。
今退いてくれるなら永遠の愛も誓えるよ？割と本気で。

「それで、百代さん。ちょっと急用があるから帰りたいんだけど退いてくれませんか？」

「お前武術の経験は？」

質問を質問で返すとか言う以前に話が噛み合つてない。会話のキャッチボールつよく言つけど。投げ返さないんじゃなくて球捕るつとすらしてないよこの人。

「えーっと話が見えないんですけど？」

「さつきの道場の前で見せた動きは中々見事だつたぞ」

「俺早く帰りたいんですけど」

「私の同じくらこの年齢での動きをするヤツは久々に見た。とうかお前で一人目だ」

「もしもーし」

何か目瞑りながら腕組んで語りだした百代さん。そういう事は部屋で一人でやつて欲しい。

「一人目は揚羽さんっていう人でな。これがまた強い上に綺麗な人なんだ」

「じゃあさようなら」

もう我慢の限界だ。

田を駆つてゐるひに通り抜け

「まあ、待て」

ガシイツ

みつとするのを肩を掴まれて止められる。

「一体何が望みなんですか？他人にあげる程お金も持つていなければ、誰かが欲しがるような珍しいものも持つていません。そもそも欲しがつてくれる友達もいません。

悩み事の相談を受けるほど人生経験豊富でもありませんし、貴方と共通するような趣味も多分持つてません。そんな俺に貴女は何をして欲しいんですが？」

余りのしつこさに少しキツメに言つてしまつたが、向こうが原因なんだ。俺は悪くない。

「そうカリカリするな。将来ハゲるぞ？」

友達が

「その友人一人の所為でストレス溜めこむ位ならいくらでも友人の頭髪を犠牲に捧げます。だから家に帰らせてください」

そもそも友達まだ居ないんだよ。

「そんな冷たい事言つな。友達出来ないぞ？」

「そんな冷たい事言つても気にしない友達を作りに行きたいので早く手を放してください」

「もしかして友達がいないのか？なら私が友達になつてやる。喜べ、こんな美少女が友達第一号だ」

「結構です。俺シャイなんで美少女が目の前に居ると全力で逃げ出しあくなるんですよ。だから視界から消えてください」

「私の言つことを聞いてくれたら消えてやらん」ともないぞ」

何でこの人は初対面なのにこんな上から目線なんだろ？。器がデカいのかそれともアホなのか。

出来れば前者であつて欲しい。これでアホじやなかつたらまだ見ぬ本物のアホに拒否反応が出来そうだ。

ともあれ、下手に話を引き延ばすよりはさつと要求聞いて消えて貰つた方が良いだろ？。

「3分以内に済む用なら聞きましょう」

これが最大の譲歩。とは言つても拒否されたら俺に成す術ないのだが。

門に来てから1分。まだ父さんは悶絶している最中だろ？か？もしかしたら父さんも、俺が既に家に帰つたと思つて諦めたかもしれない。

いや、「かもしれない」は駄目だ。もしかしたら諦めないで復活次第追つてくる「かもしれない」。家に帰るまでは油断しないでおこう。

「そうか。なら問題は無いな」

「どうやら3分以内に終わる内容のようだ。

だるまさんが転んだを1ゲームだけとかだったらしいなあ・・・

嬉しそうな顔をしながら百代さんがウンウンと頷く。

そしてその口から内容を

「私と闘　　「全力でお断りします！」

言い切る前に声を被せる。

言わせる前に言え。相手に自分の拒否意思を伝える一番手っ取り早い方法だ。ほぼ間違いなく自分に対する印象を悪くするが。

「却下だ。約束は約束だ」

「俺昨日まで殆ど家に出た事の無いモヤシっ子ですよ？そんな人間が貴女達みたいな人と戦えるわけがないでしょ」「

「勿論手加減はする」

「手加減してもヒグマ位倒せそうな人が言つても全然安心できないんですけど」

最低でも人間が勝負できるくらい手加減をしてほしい。
え？お前の実力に合わせるって？俺の実力なんてその辺の野良猫にも負けるレベルですよ。

「勝負の内容は簡単だ。お互いの体に先に一撃入れた方の勝ち」

「まだやるなんて言つてないんだけれど……」

自分の体に一撃入れて、はい終わりーって訳にはいかないかねえ……
・いかないよなあ……

まあそれほど悪い内容じゃないとは思つ。わざと一撃貰つてしまつた終わらせよ。流石に死にはしないだろう。

「はあ・・・分かりました、早く始めて下せー」

「その前に、ホレ」

百代さんが俺に何かを投げつける。

受け取つてみると、それは俺の靴だった。

「裸足じゃあ戦い辛いだろ?」

心遣い感謝しますよ。足の裏血だらけになるのは勘弁だ。

靴を履き、立ち上がるとその場で百代さんに向かい合つ。構えなんて分からぬから両手を前に出しただけのよくあるファイティングポーズ。

それに比べ向こうは堂が入つたものだ。素人の俺にも隙がないことが分かる。

「じゃあ始めるわ。合図はこの小石が地面についたらだ

百代さんが小石を空に投げる。

小石は少し間を置いて地面に落ち、それと同時に百代さんの姿がブレた。

鋭い踏み込みで俺の懷に潜つた彼女は、田にも止まりぬ速さで拳を俺の顔に叩きこむ

なんて事はせず

「あのー・・・、来ないんですか？」

1歩も動かずこちらの様子を見ていた。

何かふつふつふ、と勝ち誇った顔で笑つてるのが凄いムカツく。

「そりだな、お前こそ来ないのか？」このままじや帰れないぞ？

なるほど、Jのアマ最悪な事考えやがる。

俺がわざと攻撃を受ける事を見越して自分からは一切手を出さないつもりか。

だけど残念。

その作戦には決定的な穴があるのだよ。

そのまま向かい合つて10秒経過

「おーい、かかるーい」

30秒経過

一帰りたくないのが

45秒経過

二二

一分経く「ええい！まぢろつこじい！－！」

ほら予想通り一分と持たずに突っ込んできた。

百代さんが軽いジャブを俺の顔目がけて放つてくる。ギリギリ見える位の速さに抑えているのは流石だ。本当に俺の実力を把握して手加減してくれてるようだ。

これは当然におしまい。家に帰らせてもらえない。でも今日は友達作りにいけそうにないかな？顔を少し腫らせてるヤツなんて相手からしたら抵抗あるだろうし。

多分当たつたら痛いんだろうなあ、軽いタンコブ位は出来そうだ。
今まで家に引き籠つてたから怪我らしい怪我なんてタンスの角に小

拳がもう視界を覆うくらい迫っている。そういえば田に入ったら大

変じやないか。田を騒ぐ。

そう思つた時。

パンツ

「えつ？」

聞こえてきたのは俺の間抜けな声。そして目に映つたのは

「やつぱり」

心底嬉しそうな顔をした百代さんだった。

顔に痛みは無い。でも百代さんが寸止めしたわけでもない。俺に当てる気だったのは確かだ。

残る可能性は一つ。百代さん以外の誰かが止めた。
じゃあ誰が止めた？

一人しかいないじゃないか

俺だ。

百代さんが再び迫る。

右、左、左、左、右、左

絶え間なく飛んでくる拳。全てが俺の反応ギリギリの速度であるソレを両手が勝手に捌いていく。

突きをそらし、蹴りを躱し、受け流し受け止め弾いていく。

武術なんてやつていない俺が、本来自分には到底敵わない相手の攻撃を受けきっているという事実に驚く。

そして気がついてしまった。

信じられない、信じたくないが俺はどうやら

ヘタレらしい。

だってそうだろ？？たつた一回痛いのを我慢してしまえば解放されるのに、俺の意思とは裏腹に体が全力で回避を続けるのだ。
家に帰りたい、でも痛いのも嫌と。これをヘタレと言わずしてなん
という。

攻撃を受け切れてるのはきっと火事場の馬鹿力の親戚みたいなもの
だろう。

人間追い込まれると普段以上の力を發揮すると言つが、まさかこの
歳のこんな事でなるとは思わなかつた。

しかしどうする？

このままじゃ俺が提示した三分が過ぎてしましそうだ。少しくらい
ならオーバーしてもいいけどなるべく早く帰りたい気持ちは変わら

ない。

方法はある。俺が百代さんに一撃入れればいいのだ。

不可能って程じゃない。

百代さんは最初から俺が反応出来るレベルの攻撃に実力を抑えてくれている。

だから多分、防御に関しても俺の攻撃が通用するレベルにも抑えてくれていると思う。

希望的観測だらうがなんだらうがやらないよりかはマシだ。
勿論本当に攻撃する訳じゃない。当たる直前に勢いを殺して寸止め、
もしくは触れる程度にする。これなら大丈夫。

「せい！」

百代さんの攻撃が弱まつたタイミングを見計らつて、拳を繰り出す。
ずっと受けに回っていた俺が突然攻撃したことに、百代さんは驚いた表情をするがすぐに真面目な顔に戻りそれを防ぐ。

「やつとやる気になつたか？」

「多少はね！」

右から飛んでくるフックを頭を下げる躲し、それを見越して繰り出された膝を横に飛んで避ける。

お返しとばかりに見よう見まねの蹴りを出すが、百代さんは体を後ろにズラす事で避け、拳の雨を俺に降らす。

「やつぱりお前面白い！面白いぞー！」

何か百代さんが言つてゐるが答える余裕なんてない。矢継ぎ早に飛んでくる攻撃を防ぐだけで精一杯だ。

合計24の拳を全て受け切ったといひでよつやく攻撃の手が休まり

「ほら！休んでる暇は無いぞー！」

槍のように突き出された足が飛んできた。

受け止めようとしたら体ごと吹き飛ばされそうな蹴り。

俺の体はいつものように勝手に受け流そうとしてうと添えた手が大きく弾かれた。

「つーーー！」

蹴りは一直線に俺の腹臍がけて飛んでくる。

それを当たたるギリギリのところで体を無理矢理捻りなんとか回避に成功する。

マズイ、無理矢理避けたせいで体勢が

「楽しかつたぞ、またやろうな」

回避不可能な突きが顔に迫る。

弾かれていな方の手で何とかそれを受け止めるが、ただの悪あがきだ。

もう片方の拳がさつきと回じコースで飛んでくる。

『どうしたらいつも避けられる…どうやつたらいつも避けられる…』

そこで俺は気づいた。

いつの間にか、どうすればこの突きを防ぐことが出来るのか考えて
いる事に。

いつの間にか、体が勝手に動いていたのではなく、自分の意思で百
代さんの攻撃を防いでいたことに。

馬鹿な話だ。

家に帰る邪魔をするなど何度も言つておきながら、この瞬間俺は自
分の意思で戦いを長引かせていたのだから。

やけに飛んでくる拳が遅く見える。

いや、それでも十分目で追うのがやっとの速さだけど、何故かそう
感じた。

人は死ぬ直前に見えるものが遅く見えるところが、それに近いもの
だろ？

でもまあ関係ないか。どうせ避けられないものは避けれ

そんな単語が頭の中に浮かぶと同時に、俺の中にそんな確信が生まれた。

拳が俺の鼻つ面に触れるまで数センチ。瞬きする間もなく拳は俺の顔に当たる。

どうあっても防げるはずはない。

なのに

気付けば俺は、百代さんの真横に移動していた。

百代さんの突きは俺とは50センチ以上離れた場所の空気を切り裂くだけに終わる。

勝ちを確信したとき、人は一番油断をする。どこかで読んだ本に書いてあつたことだが、今の百代さんはそれ。

絶対に避けられると思つていなかつた突きが外れた事に驚き、体を硬直させている。

俺はそんな彼女のわき腹に拳を叩きこもうとして

「カハツ！！」

吹き飛ばされた。

余りの衝撃に肺の中の空氣が全て叩き出され体が宙を舞う。そしてその直後に来るのは体全体に伝わる一度目の衝撃と砂の味。

最初、一体何が起こったのか分からなかつたがすぐに道場で見た光景を思い出す。

そういうえば、道場で彼女と闘つていた時はこんな感じだったな。と攻撃なんてする素振りを見せてなかつたのに、いつの間にか相手が吹き飛ばされている。

それほどに速い動きでの一撃。

今なら吹き飛ばされてた人の気持ち良くなれるわ。

これズルい。

つか手加減してくれるんじやなかつたのかよ。約束守れって言つ割に自分は守つてないじゃん。

そんな言葉を最後に俺の意識は徐々に闇に沈んでいく。

やつぱり嬉

最後に見たのは誰かが慌てて駆けつける音と
しそうな百代さんだつた。

幼少期編 第四話（後書き）

やばい、戦闘描写がここまで難しいとは・・・これでも6時間近くかけて悩みながら書いたんですが全然ダメですね。

何か重要な表現いくつも抜けてダイジェストみたいになっちゃう気がする。

でもやっぱ戦闘シーンを書いてるのが一番楽しいです。
好きこのものなんとやら。色々な作者様の作品を読んで勉強します。

side 百代

ソイツはその日突然現れた。

最初見たときは私くらいの年齢の男が道場に来るなんて珍しい、多分入門希望者だろうとしか思わなかつた。でも、一緒に居る人には見覚えがあつた。

確か武さんとつぐみさん。昔川神院に居た人で爺達と仲が良くてまことに遊びに来る人。私も何度か話したことがある。
「…」
といふことは一緒にいるのは息子さんか？

少し気になつたから声を掛けよつとしたのに、爺のヤツが邪魔した
せいできつた。

確かに道場壊したのは悪かつたさ！でもイキナリ殴ることないだろ！

でもまあ、最近は中位の門下生も相手にならなくなつてきて少し退屈だつたから爺と戦えたのは楽しかつたな。手加減されているのはちょっと悔しかつたけど・・・。いつかは本気を出させてやる！

今日戦つた人も、数か月前は良い勝負を出来たのに今じゃ倒すのに数秒とかからない。

別に相手が弱いわけじゃない。私の才能が異常なのだと、爺はよく言つ。

後数年すれば、師範代と爺以外で私の相手を出来る人は川神院には居なくなると、釈迦堂さんが言っていた。

結局爺との戦いはルーさんに止められてしまつたけれど、満足だ。後で荒れた道場の片づけ爺としろつて言われた時は思わず爺と一緒に文句を言つてしまつたけどそれでも満足だ。
といふか爺、その歳で「えー」は無いと思ひつい。

そこで、何やら負の気がこもつた声を聞こえてきたからその方向に目を向けると、何故か出口に向かつて逃走している武さん達の息子（仮）とそれを追う武さんが居た。

理由は分からぬけど面白い事になりそうだ。

そう思つた私は止めようとするルーさんを振り切つて一人の後を追つた。

二人の廊下で見せた動きは中々のものだつた。

門下生の間を素早く走り抜ける息子（仮）に壁を走つて追いかける武さん。

確かあれば氣を使った移動法の応用だったか？私にはまだ出来ない技だ。

道場の外に出た後も面白かつた。

逃げるのをやめた息子（仮が）武さんに素人とは思えない素早い突きを放つた。何か武術をやつているのだろうか？
でもそれを軽々と避ける武さんも出来る。

と思つたら空ぶりした拳から出てきたのは田つぶしの砂。息子（仮）は最初から当たるとは思つてなかつたらしい。
でもそれも完全に防いだ武さん。

しかし、それも読んでいたかのようだ。息子（仮）は武さんとの金約を蹴り上げた。

周りを見ると門下生達が呻き声をあげながら田を逸らしていた。女の私には分からぬがアレは粗鄙きついらしい。組手の時は攻撃が禁止されている部位だからやつぱり痛いのだひつ。

そんな事を思つてゐるうちに息子（仮）が門に走つて行つてしまつたので追いかける。裸足じや帰るのも困るだらうから靴くらいは持つて行つてやるわ。

茂みを飛び越えたり抜け道を使つたショートカットをして門に着くと、一度息子（仮）がやつてくるところだつた。

息子（仮）は私を警戒してゐるよう見える。まあ先回りされいたら当然か。

早く帰りたがつてゐるアーヴィングにいくつか質問をした。
名前は識丈 悟と言つらしい。

私がいろいろと話してゐるのに無視して帰らつとするから、つい少し強引に引き留めてしまつた。

すると悟は、やつとまでの丁寧な口調を少し荒くしながらも文句を言つてゐた。二つちの方が素みたいだ。

しかし、友達にならうと言つたのに視界から消えてくれつていうのは少し酷いんじやないか？確かに強引に引き留めている私が悪いけれど。

少しムツと來たので私は悟に少し意地悪をしたくなつた。

私と勝負をしてくれたら帰つてもいいと。

一撃先に当てた方の勝ちだからそんなに時間もかからない。

悟は武さんから早く逃げたいみたいだけど、アレだけ綺麗に入った金的だ。あと5分は動けないから問題ないだろう。

靴を悟に渡して向かいあう。構えは全然なっていない。コレで分かつた。悟は武術の経験は全くなない。

という事は武術の経験のない子供が不意打ちとはいえた武術の経験のある大人を破つたことになる。

やつぱり面白い。そう思つと同時に悟に対しての興味がまた湧いてくる。

でも数秒経つても悟から仕掛けてくる気配はない。
多分道場で私の実力を見たから少し腰が引けてるのだな。

でもそれじゃあツマラナイ。相手の実力を知るには実際に攻撃を受けるのが一番なのだ。
だから私も動かないとした。

フツフツフ

これなら私に攻撃するしかあるまい！

なんて思つたら、悟のヤツ全く攻撃してこないじゃないかーこれじやあもつとツマラナイ！
作戦変更だ。私から攻撃して悟の動きをみるとよ。

と言つても本当に殴るわけじゃない。

敵意の無い素人相手を殴るのは武術家として最低の行為だ。そんなの分かつてゐるし、私もやりたくない。

だから悟が避けられなくても、当たる瞬間に拳を止めてチョンと押す程度にするつもりだ。

攻撃を当てるといつも「気迫」「だけ」を込めた拳を悟に放つ。でも悟のヤツ、完璧に見えているはずなのに防御どころか避けようともしない。

予想外の反応に私が少し戸惑つた時、当たる直前になつて悟は私の拳を綺麗に弾いた。

驚いているのは悟自身。体が勝手に反応したのだらう。

「やつぱり

」

思わず笑みがこぼれる。予想通り、いや予想以上の動きだ。つい面白くなつてどんどん攻撃の速度を上げてしまつた。すると、今度は悟の方からも攻撃してきた。

当てる気がない一撃。多分私と同じで私を傷つける気はないようだ。

そこからは私も少しスイッチが入つてしまつて、氣を使わない状態での殆ど全力の攻撃をしたが悟のやつ全部それを受け切つた。

やつぱり戦うなら同年代のヤツと戦うのが一番楽しい。

でもそろそろ三分が過ぎてしまつ。残念だが約束は約束だ。三分が経つ前に終わらせなきゃいけない。

私は悟には防げない蹴りで悟の体勢を崩し、その顔に突きを出す。当てるつもりはないが、鼻先をちょっと小突いてやろうなんて思つていたら、そこで今までやる気のなかつた悟の顔が諦めていない表

情に変わっている事に気付いた。出来れば最初からその感じに戦つて欲しかつたな。

ともあれこれで終わり。勝利を確信した私は完全に油断していたと言つてよかつた。爺や師範代たちからは、戦いが終わるまで決して油断をするなど何度も教えられたのにも関わらず。

だから

拳が悟に触れる直前。

悟の体から急にあふれ出した氣を前に、思わず止めようとした拳を振りぬいてしまった時はかなり焦つた。

でも、一番驚いたのは。

私でも避けれらかどうか怪しいタイミングだった攻撃を避け、私の横にいつの間にか回り込み一撃をくえようとしたことだ。

反射的に氣を使い、本氣で迎撃してしまったときは本当にマズイと思つた。

悟は10m近くを吹き飛ばされ、受け身も取らずに地面上に叩きつけられた。

下手をしたら死んでしまったかもしれない。最悪の展開を予想して頭から血の氣が引くのを感じる。

でも大丈夫だつた。悟の氣の量は全く変わっていない。
悟の氣が体を守つたのだろう。

悟はブルブルと震えながら私を見て

「これズルイ」

と言つと意識を失つて動かなくなつた。

私は武術家として最低の行為をした。それを自覚しながらも顔が笑うのを抑えられなかつた。

今の悟の攻撃は、正真正銘私が全力を出さなかつたら防げなかつた。それが私を歓喜させる。

悟が氣絶するのと同時にやつてきたルーさんと爺が慌てて悟の容態を確認して、すぐに安堵した表情を見せた。

そのあと拳骨を4発も私に落とした爺は「後でお説教じや」と言い残して悟を院内に抱えて行つた。

お説教は面倒だけど今回は全面的に私が悪いから仕方ないか。それよりも悟には謝らなきやな。面白いヤツだつたから出来れば仲良くしたいし。

どうやつて謝るか・・・

といつあえず、悟が起きるまでに考えておこう。

手抜きと言わればそれまで。下手くそと言われてもそれまでな文章だということは自覚しております。これでも頑張つて書いたんですけど・・・。

という訳でお送りした第四話「裏」でした。

今回は悟に興味を持った百代の視点からのお話。

前の話だけを読むと、百代さん我儘な悪い子というイメージがつきそうだったので少し焦りました。

感想でも書いたのですが、本作品はアンチ的な要素は入りません。今現在主人公は川神院に対しても少しアンチ的な考え方を持つていますが、すぐにそれも無くなります。

アンチ展開を望んでいた方はごめんなさい。ぶっちゃけ次回の話で主人公の考えはかなり変わります。

今回はプロローグを除くと過去最短記録。

多けりゃ良いってもんぢゃないけど、もう少し量を増やしたいです。

幼少期編 第五話（前書き）

最近アクセス解析といつものがあることに気づきました。

いつの間にか5万PV・一万ユニーク突破していたことにビックリしましたw

それだけ多くの人に見てもうえてとても嬉しいです。

見てくれた皆さんに感謝を(^人^)

目が覚めて最初に目に入ったのは何の装飾もない茶色い木の天井。普段は少し黄色のかかつた白い天井が見えてくる筈なのだが、まだ寝ぼけて回つていな頭はそれを違和感と認識せず受け入れていた。

取りあえず何かして頭を起動させるか・・・。折角の木の天井だ。木目でも数えてみようかな・・・やめておこう。

なんでそんな悲しい一人遊びをしなきゃならんのか、友達いないみたいじゃないか・・・居ないけどさ

背中から伝わるベッドより固い柔らかい感触で、多分これは布団というやつだろうと判断する。

首を動かしてみると、分かり切っていたことだけどそこは自分の部屋ではなかつた。

十畳以上はありそうな中々広くて立派な部屋だが装飾品は殆ど無く、家具も一切ない。せいぜい和室として最低限の威儀を保つために達筆な文字で「勇猛邁進」と書かれた掛け軸があるだけだ。

襖の向こうはすぐ外のようで、小鳥のさえずりが聞こえてくる。

そういうえば、どつかの本で読んだことがあったな。確かこういう時にはお約束があつた筈。

「知らない天　　「ん? 起きたか?」

音もなく襖が開き、百代さんが入つてくる。

「ん? どうした?」

首を「コテン」と傾げてじゅらりを見る百代さん。

やばい、聞かれたか？いや、別に聞かれたところでなんの問題もないんだけどなんとなく恥ずかしい。

これはアレだ、以前部屋の中で気合入れて叫べば出せるんじゃないとかと某衝撃波ビームを練習しているのを父さんに見られた時と同じ感じだ。

その後父さんは「俺も昔やつたもんだ」なんて慈愛に満ちた目で見ていた。「アンタもやつたんかい！」なんて羞恥心の余り当時は全力でツツ「コミ」を入れてしまつたが最近の人外っぷりを見ると本当に出せるんじゃないかと思つてしまつ。

話しが逸れた。これもアホな事言おうとした十秒前の俺のせいだ。

でもこれで現状はほぼ把握できた。

百代さんが居るといつことはこにはまだ川神院だらつ。

俺はすぐに布団から飛び起き、逃走を再開する　　よつな事はない。

もういいや、疲れた。それに何故か、昨日まであつた絶対に逃げるという意思がかなり弱くなつていてる気がする。

昨日あれだけ非常識なものを見せられたせいで少し耐性が付いたのかもしれない。

「おはよひびわこめす」

顔が少し熱いのを自覚しながらも百代さんに挨拶する。言つた後に気づいたけど時間的にはここんところはが正しいのかな?この部屋に時計は無いから確認できなければ今何時だろう?

裸の向こうから差し込む光からして、まだ夕方にはなつていないようだが。

「うふ、おはよひ。ひひじい、朝の挨拶は一日の始まり。ちゃんとしなきゃな」

ウンウン、と百代さんは満足したよつと頷く　　つてちょっと待て。

「一日の始まりって聞こえたんですが氣のせいですか?」

「氣のせいじゃない。お前は丸一日寝てたんだぞ。今は朝の九時過ぎだ」

そういえば昨日は殆ど眠らずに川神院に来たんだった。
逃げるのに必死で忘れていたけど、疲れと眠気で氣絶した後そのまま夢の中に直行してしまったといつことか。

と、俺が納得して布団の上で腕を組んでいると

「それはねうと語、まあ、なんだ、その・・・」

「どうしたんですか?」

急に視線を逸らして歯切れ悪く何かを言おうとする百代さん。
昨日の傍若無人な態度からは想像も出来ない姿だ。

「五百をもせじまへりあると、その場に正座をして

「昨日はすまなかつた」

俺に深々と頭を下づた。

予想外の行動に少しの間思考が停止する。最近俺思考停止してばつかりだな・・・

しかし急に土下座されて平然と出来る程俺の神経は図太くなく、すぐ頭を上げるよつて言おうと手を伸ばし、すぐ止める。これも彼女のケジメの付け方。すぐに頭を上げてと言われて上がる訳がない。

「ええ、帰るのを邪魔されて大変迷惑でした」

「うう・・・」

「しかも強制的に勝負しなきやいけない状況に追い込まれたときは何考えてるのかと思いました」

「うぐう・・・」

「拳句の果てには殴り飛ばされて氣絶せられました」

「さういふ・・・」

俺が辛辣な言葉が百代さんに突き刺さる。

そのたびに百代さんは呻き声をあげながら徐々に涙目になっていく。

ちょっと可愛いなー、なんて思つたりはしてない。俺は女の子をイジメて悦に浸るような趣味は無いのだから。断じてない。

「でも……、ちゃんと謝つてくれたから許します。頭を上げて下さい。百代さん」

そもそも彼女に全て責任があるわけじゃない。

父さんがここに無理やり連れてきたせい。百代さんが勝負を持ち込んだせい。百代さんを止められなかつた川神院のせい。

周りのせいにするのは簡単で、今回は確かにその通りなのだが周囲だけに責任を求めるのは違う。

結局のところ自分のせいなのだ。

両親に心配をかけなければ無理矢理川神院に連れてこられることも無かつた。逃げ出さなければ百代さんが俺に興味を持つて勝負を持ち込むこともなかつた。

昨日の事は全て自業自得。

両親の意思を尊重しながらも自分勝手に迷惑をかけた代償。
現実から目を逸らして逃げていたのが原因で、優柔不断で心の弱かつた俺が招いた結果だ。

だから俺に、川神院の人達を非常識というだけで差別し関わらないようにした、自分の事しか考えなかつた俺に一方的に周りを責める権利なんてあるわけがない。

「お前って、結構意地悪なんだな」

田元を「シ」拭きながら百代さんが「スッ」とした田を向ける。多分レアな光景だ。

「ハハハ、面白いものが見れました」

「笑うなよーー…どう謝つたらいいかすっ」「恼んだんだからな！」

顔を赤くしながら言つ百代さんは見てついもつと大きな声で笑つてしまつ。

そうすると百代さんはもつと「スッ」とした顔で非難する田を向けてきたので流石にやめた。

彼女は誠実だ。他人に対しても、自分に対しても。
だから自分がやりたいことを貫き通し、それで自分が間違つた事をしたと思えば「つして素直に頭を下げる。

きっと自分に正直に生きてきたんだろうな。子供だから当たり前の
ような気もするけど、この人はずっと真つ直ぐに生きていく、そん
な気がする。

ああ、なるほど。

俺が川神院に対しての忌避感が薄まつた理由が分かった。

百代さんと相対したとき、五分にも満たない短い時間だったけど俺は彼女の誠実さに気づいたのだろう。

先ほども思つたが、俺は他人を思つてゐるフリをした我儘なヘタレだ。だからこそ、その誠実さに憧れた。

これが彼女のカリスマってやつなのかな？それともこれが本で読んだ殴り合つて深まる友情といつやつか？まあ俺一撃も当ててないけど。

それよりも

「百代さん

「何だ？」

「俺の方も、昨日はあなたに酷いことを言つました。『めんなさい』

今度は俺の番。百代さんが俺でしたように、布団の上に正座をして頭を下げる。

「いや、そもそもの原因は私だ。お前が頭を下げる事じゃない」

「それでもです。流石に『視界から消えてトトソ』は言つすぎました

た

「まあ確かにアレは少し傷ついたけどな・・・。うん分かった、私もお前を許す。これで良いか？」

「ありがとうございます」

ゆつくりと布団から手を離して百代さんと向かい合つた。

笑顔になっていた百代さんを見て、つい俺の方まで笑顔になる。

これで後腐れは無くなつた。

俺と彼女の関係はお互いの名前を知つてゐるただの知り合いになつた訳だ。

でも

「あともう一つ」

「なんだ、謝罪はもういいぞ」

なんだかそれだけじゃ勿体ないな。折角初めて会話した同年代の人なんだ。

「良かつたら俺と友達になつてください」

右手を出しながら言ひ。

百代さんはしばらく俺の手を見つめてキョトンとした顔したけど

「勿論だ。私からも頼む」

そつとつて快く手を握ってくれた。

幼少期編 第五話（後書き）

あれ？ いつの間にか主人公の性格がSっぽくなっていた！？
あれ？ いつの間にか百代さんが物凄いヒロインっぽい位置に！？

何が起こったのか分からねえ・・・いつの間にかこうなっていたんだ
だ・・・

といつわけでお送りした第五話でした。キリが良かつたので今回は
ここまでです。

自分で書いていて余りの可愛さに危うく百代派になりそうだった作
者の一番好きなキャラはマルさんです。
まじこいSのキャラ紹介ページのラフ画（～）、それも寝ぼけたマ
ルさんの破壊力は凄かつた・・・
今さらだけどマルさんヒロイン入りおめでとう！

ちょっとと考え方を変えたの急すぎたかな？でも自分の中にあるもの
をすぐに変えることが出来るのも子供の長所だと思います。
け、決してさつと話を進めたいっていう理由、じゃありません（
；；

後2・3話すれば幼少期編はお終い。小学校編に突入です！
もっと他の原作キャラとも絡ませたいです。

お待たせしました。少し時間が空いてしまいましたが更新できました。

実は就職の試験日が十日をきつてしまつたため流石にヤバイと現在追い込みをかけている最中だつたりします。

そのため十日ほど更新が止まります。楽しみにしている方、ごめんなさい。

しかし！その試験さえ受かればしばらくはバイトをしながら遊べる半一年生活が待つてるので更新速度が戻ると思います。

百代さんと友達になつてから早一月。

この街（世界かもしれない）の最大の非常識である川神院がある程度克服した俺にもう行けない場所は無くなつた！

フハハ！路地裏から商店街まで全て踏破してやるぞ！

・・・少し気分が高ぶつた。

最近気づいたのだが、俺はビーフやら外に出て遊ぶことが結構好きらしい。

最近は週の半分どころかほぼ毎日出かけるようになった。

行くところは大抵河原にある広場。それ以外は街を一人で歩いたり、百代さんに引きずられながら色々回つたりしている。

そのおかげで友達もたくさん出来た。

河原で遊んでいる子達の仲間に入れてもうつたり、本屋で本眺めているちょっと年上の人と友達になつたり。

でも一番は百代さん経由で紹介してもらつた子達が多いかな？
百代さんが友達が多いことに最初は少し驚いたけど考えてみれば当たり前の事だとすぐに納得した。

運動能力が抜群で容姿も美少女と言つていいほど良く、裏表のない活発で明るい性格。

人気者の要素盛りだくさんだ。周りに人が集まらない訳ない。

そんな大人気な百代さんなのだが、前の一件以来俺の事を気に入ってしまったらしく、俺の部屋に漫画が大量にあると知った百代さんは稽古が無い日は俺の部屋に入り浸つていて。（漫画よりも小説の方が遙かに多いのだが百代さんはそれに目もくれない）

百代さんが通う小学校の図書館より数が充実している上に走つて5分程度の距離（4kmはあるのだが）である俺の家は遊びに来るのに丁度良いのだとか。

「悟一、コレの次の巻が見当たらないぞー」

「それは前に図書館から借りてきたものだからそっちのカバンに入つてます」

部屋の主である俺を差し置いてベッドを占領している百代さん。それを椅子に腰かけながら、本から田を外さないでベッドの横にあるカバンを指す俺。

見当たらないと言しながら百代さんは全く探したような気配が無かつたのは氣のせいではないだろう。

「この青いカバンか あつたあつた」

出会った初日で人外認定をした百代さんも今は子供らしさ全開で目を輝かせながらページを捲る年頃の女の子。読んでいるのは少年誌のバトル漫画ばかりなのは百代さんらしいが。

しかしバトル漫画のとんでも技を再現するのはやめてほしい。

前に某明治剣客浪漫譚の悪一文字を背負う登場人物の必殺技をやつ

ていたときは腰を抜かしたものだ。

百代さん曰く「意外と簡単」らしい。さらに言えば普通に殴った方が威力が高いらしい。もつやだこの人。

「もうそ、明日は夕方から暇なんだが空いているか？」

「大丈夫ですよ。小学校入るまでは基本暇だし」

「じゃあ明日3時に河原の広場に集合だ！」

「了解です、他の子達にも声かけておきますか？」

「別にいい、遊んでいれば勝手に集まつてくるだろ」

勝手に集まつてくる。一ヶ月前まで友達が一人もいなかつた俺からしたら羨ましい発言だ。

まあ本当に集まつてくるから凄い。昨日なんて一人で遊んでいたのにいつの間にか11v511のサッカーになつてたときは驚いた

「でも対戦型のスポーツは嫌ですね。昨日のサッカーミたいに百代さんが入つたチームが勝利確定なんてのは勘弁です」

百代さんが一人で毎回20点以上も取るから試合にならないのだ。同年代なのに大人げないと感じるのはなぜだろうか・・・。

「分かつてるよ。ちゃんとハンデはつける」

いや、ハンデがどうのこうのという問題では無いのだが。

「いや、両足使わないなんてサッカーに喧嘩売るハンデつけときながらフ得点決めた人には意味のないことです」

「いや、両足使わないなんてサッカーに喧嘩売るハンデつけときながらフ得点決めた人には意味のないことです」

「じゃあ今度は一歩も動かないっていつのはどうだ？」

「それでもハットトリック決める予感しかしませんよ。といつかやつてて楽しいですかソレ？まあ対戦型のスポーツをやりたくないのには他にも理由があるんですが・・・」

「ん？チームプレイ嫌いなのか？駄目だぞ、協調性の無いヤツは仲間外れにされるからな」

「あ～、と溜息を吐く俺にありがたい言葉をかけてくれるのは嬉しいが

「唯我独尊を地で行く百代さんが言つても説得力ありませんつて褒めてないから照れないで下せー」

ベッドの上で「それほどでも」と言いたげに頭を搔く百代さん。更に言えばこの人は唯我独尊を地で行つても仲間外れにされないで説得力なんてものは欠片もない。

「で？なんでやりたくないんだ？」

改めて、と百代さんは俺に視線を戻す。

別にチーム戦が嫌なのではない。むしろ味方と連携してショートを決めるのには友達が居なかつた俺からすれば憧れるものだ。が、しかし

「百代さんと俺が同じチームになつたことがありますか？」

「ないな あ、なるほど」

この言葉で百代さんは納得したようだ。

「毎回百代さんと敵チームに入れられてそのたびに大差で負ければ嫌にもなりますよ。何故か毎回一人で百代さんの相手させられるし・・・。」

百代さんがボールを持つていなくともマンツーマンで張り付き、ボールを取つたら真っ先に突撃させられ、百代さんの近くにいるせいでボールなんて回つてこない。

チーム戦なのに殆どチームプレイ出来ないのは何故か。

嫌な役ばっかり押し付けられてる気しかしないので、嫌われてないよな俺・・・?なんてたまーに本氣で心配している。

「そりゃバランス考えたら普通そうなるだろ」

「確かに俺は運動神経そこそこいいみたいですが・・・」

これも最近分かつことなのだが、俺は人外の父の血を引いていいるお陰か運動神経は結構良かつた。

具体的に言つと木から木に飛び移るくらいなら朝飯前、くらいのレ

ベルなのだが

「はあ～・・・」

なんで溜息を吐くのか百代さん？

俺そんな呆れられるようなこと言つた覚えはないのですけど。

「セーヴィージャないんだけどなあ・・・」

「せりゃ百代さんと比べたら俺の運動神經なんて射的の得意な丸メガネの少年レベルでしょうよ」

そもそも百代さんと比べるなら世界の一 流アスリートを引き合ひにださなきゃいけない。

「セーヴィージャないんだけどなあ・・・」

何か諦めたような顔でこちらを見る百代さん。

何だこの暗い百代さん。結構可愛いぞチクショウ。

「なあ悟、やつぱり川神院に入つてみないか？お前なら師範代にもきつとなれるぞ」

「またその話ですか。いくら人外の血を引いているとしてもトラック片手で止められる化け物になれる訳ないじゃないですか」

「いや、別に師範代はトラック止めなきゃなれない訳じゃないからな？」

それくらい分かりますよ。

そつそり、俺が非常識に触れるきっかけになつた元凶の元凶であるトラック事件。

なんとアレの犯人（？）は川神院の師範代だった。名前は釈迦堂さん。そういうや母さんが釈迦堂さんがどうたら言つていたのが記憶の片隅にあつたな。

まあ出会つた瞬間に回れ右をしてダッシュで逃げてしまつたのだが・・・。

百代さんと友達になつたことで大分慣れたと思つたけど、すべての元凶である釈迦堂さんはそもそもなかつたらしい。釈迦堂さんが半径10m以内に入ると体が拒否反応を起こし逃走を開始してしまうのだ。

離れて話してみた感じでは面白いおじさんだったので出来れば早く慣れたい。今の目標は9mで話すことだ。

「今はもう少し外を見て回りたいんです。体を動かすのは好きだから落ち着いたら入るかもしだせん」

「それ、本当だな。他の道場に行くとかナシだぞ？」

川神市は武術の総本山と言われる川神院があるせいに道場やジムの数が他の地域よりもかなり多い。

種類は空手は勿論力ポエラなんてややマイナーなものまである。まさに武の聖地。

そのため教え子の数が足りない、といつのは良くある話のよつでどこの道場でも年中入門者は絶賛募集中らしい。

「分かつていますよ。折角の縁ですからその時は川神院に行かせて

貰こまか

「本當だな？約束だぞー。」

ガバッ！と身を乗り出しながら嬉しそうに叫び百代さん。
本当に百代さんはいつもでも楽しそうだ。お蔭で一いつまで楽しくな
つてくれる。

そのあと外に出かけたいと言つた百代さんに連れられて河原で遊ん
でいたら、いつも通りどっこからともなく大勢の子達がやつてきた。

百代さんはさりげない宣言通り一歩も動かないといつハンデを付けた
のだが、結局13対4でこちらの負けになるのだった。

次は目隠しでもしてもらおうか？

幼少期編 第六話（後書き）

とこう訳でお送りした第六話でした。

なんだか百代が可愛すきでもうヒロインにしたいくらいです。

最近友人にまじ恋をやつとのことやらせることに成功。

そしてやらせて3日で全 を終わらせたことに驚かされました。

おい友人・・・、大学休んでないだろうな？

小学校の入学まで半年を切った今日この頃。

今日もいつもと変わらぬ休日の朝。

何故か俺が起床するよりも早くリビングで朝食にあり付いていた百代さんと一緒に家族で朝食を食べていると、そこに電話がかかってきた。

相手は俺が良く利用している市立図書館の館長さんで、新しい本が入ってきたから連絡したこと。

そういうえば最近は外で遊ぶ機会が出来たせいか、2週間程図書館には行つていなかつた。（以前なら借りてきた本は3日程度で読み終わつてしまつので週に2回は通つっていたのだが。）

でも今日は百代さんが既に遊びに来ているので、明日行くことを伝えようとしたらい

「図書館に行くのか？私は行つたことがないから行つてみたいな」

「こう百代さんの発言により予定を変更して今日図書館に行くことになつた。

いつも街を案内してもらひつているのだ。たまには俺が百代さんを案内するのもいいだろ？」

とこうことで現在川神市立川神中央図書館來ている訳だ。

「おお～、ここが図書館か。結構広いな」

自動ドアを潜り見えてきた本で出来た世界を見て、百代さんが感嘆の声を上げる。

本の山、本の海、本の森。大自然を表す表現ならどれも当てはまつてしまつほどの本の数。

蔵書数国内8位、年間利用者数国内9位といつ市立とは思えないクオリティーを誇る川神図書館。

普段他の図書館を利用している人にも圧倒される光景だろう。

「あまり大声を出さないで下さい。図書館では静かに、これは日本共通のマナーです。あと館内では走っても駄目ですよ」

口に人差し指を当てながら来る途中にも教えた最低限のマナーを改めて口にする。

そういえば外国と日本では図書館の概念が随分と違つらしい。

アメリカの図書館では基本的さくしても咎められない場所が多く飲食して寝ても大丈夫な場所まである

らしい。

イスラエルだと図書館では静かどころか様々な学問での討論が飛び交っている

らしい。

何分実際に見たことないので分からぬけど、とりあえず静かに本を読みたい派である俺はアメリカの図書館を利用してもその場で本を読む日は来ないだろう。

イスラエルの方は一度行ってみたいかもしけない。イスラエルに行く機会があったら、だけど

「漫画『コーナーはどこだ?』

「向こうです」

漫画の棚がある方向を指さすと百代さんは返事も礼も言わずに俺の全力走より速い早歩きで向かつていった。

いや、走らなければ良いって問題じゃないんですけどね百代さん。まああの人なら他人とぶつかるような事はないと思うが。

こここの図書館はかなり広いし本棚のせいで迷いやといから迷子にならないか?と普通の子供なら心配するだろうが問題ない。

そこは百代さんクオリティー

あの人半径50m以内なら俺の『氣』を探知し識別出来るというどつかの念能力者の達人もかくやという謎技能を持っているのだ。

今はまだ探知は出来ても数人しか識別は出来ないと言っていた。その中の一人に俺が含まれているのは嬉しいことなのだが、かくれんぼする際に百代さんが俺を真っ先に見つける原因になっている辺り少し複雑だ。

とこつか図書館を案内しようと思つたんだけどなあ・・・

「おやおや、悟君。久しぶりだね」

ふと自分の名前を呼ぶ声に振り返る。

俺を君付けで呼ぶ人は鉄心さんかルーさんの他に一人しかおらず、今の時間だと一人は川神院で指導に精を出している時間なので誰かは限られる。

「山野辺さん。お久しぶりです」

その人物の名前を呼びながら振り返る、間違えたらかなり恥ずかしいな、なんて思つたが予想通りそこにはスーツを着た40代半ば程のナイスガイ。

図書館員の証である赤い名札を付け物腰の柔らかい雰囲気に柔軟な笑みを浮かべた、人畜無害なオーラをまき散らしている人物は山野辺さん。この図書館の館長を務めている人で今朝俺に連絡をくれた人だ。

俺が外に脱引き籠りを成功する以前からの数少ない知人で、俺の本仲間であり先輩。

もつともこの人は俺みたいん物語だけではなく学術書やら児童書まで幅広く愛読しているのだが、それでも俺が読んだ物語の数などこの人の10分の1にもなつていねいだろう。

「今日は可愛らしい御嬢さんと一緒に笑う山野辺さんと一緒だね。悟君もそういうのを気にする年頃かい？」

百代さんが去つて行つた方を見ながらニヤニヤと笑う山野辺さん。不快に感じるのは山野辺さんの人柄を知つているからか。

「分かつて聞いていますよね？彼女はただの友人です」

「おやおや残念。小さな友人に恋人が出来たと思つたのに・・・」

まあ可愛らしいという点は同意しますよ。

あれで人間としてオーバースペックじゃなかつたら惚れてるかもし

れません。

「それよりも驚いたよ。本の虫の悟君が一週間も図書館に来ないなんて。天変地異の前触れかと思つたじゃないか」

「天変地異なら割と毎日起こりうると思いますよ。主にこの街にある武術の総本山で」

昨日も川神院を震源地にした震度3が観測されたしね。

「フフッ、悟君。天変地異でも毎日起きればそれは日常に屬する」とだよ」

俺の頭をポンポンと叩く山野辺さん。

ありがたいお言葉だ。俺が川神院に（強制的に）連れて行かれる前に聞いていれば少しマシな結果になっていたかも知れない。

「それよりもアレは？」

「用意していますよ。悟君がここ2週間は来なかつたので随分と溜まってしまいました」「

『例のアレ』と言つても別に危ないお薬とかそういう類のものじゃない。

ここは図書館。つまり答えは一つ。何の捻りもないが『例のアレ』とは本の事だ。

背を向けて歩いていく山野辺さんの後を追つて受付カウンター通り、関係者以外立ち入り禁止と書かれている扉をくぐると、そこ

は10㍍ほどの廊下。

突き当りには職員用の出入り口があり、そのほかには無記名のプレートが貼つてある扉しかない何とも殺風景な廊下だ。

山野辺さんは鍵が30はついている鍵束を取り出すと、迷いなく一つの鍵を選び廊下唯一の扉を開け、俺をそこに招き入れる。目に入つてくるのは、一般公開されている場所の数倍はギュウギュウに敷き詰められた本が収まっている棚の数々。

ここにあるのは表に出すのはちょっと過激だつたり、ちょっとマイアックなジャンルだつたりする本達だ。

ふと手近な『教本』のプレートが貼りつけられた本棚から一冊手に取り

『素手で熊を倒す108の方法 橘平蔵』

「……」

タイトルを確認して音も無くそつと戻した。色々と突っ込みどころのあるタイトルだった。

以前の俺ならネタとして読んだかもしれないが、実際に素手どころか気合だけで倒せそうな人たちを知ってる今では読む気になれない。

読んだら俺まで人外の道を一步踏み出しそうな気がしてならないのだ。

その後、『私用』と書かれたロッカーから山野辺さんオススメの本をネタバレを含まない程度の解説を交えながらチヨイス。

一週間図書館に来ていなかつたので、その本達の数は俺の体の倍くらいはありそうな量になつていたのと（いつ俺が來てもいいように）山野辺さんは毎日少しづつ自宅から本を持つてきている）

山野辺さんの紹介の仕方がとても上手くてどれを持って帰ろうかと悩みに悩んだのだが、山野辺さんの「選べないなら全部持つていけばいいじゃない」という発言に全て解決思わず「マジっすか！？」と体育会系な返事をしてしまつた。

「これはモリモツサ国の人間が書いた民族間の闘争を題にした物語ですね。

14世紀初頭、とある平原に住む一人の強く美しい少女を巡つて二人の民族長の決闘から始まる民族の戦い。果たして少女の心はどうやらに揺れ動くのか・・・」

山野辺さんの声をBGMに最初の数ページを流し読みをしていると頭に浮かぶのは百代さんの顔。

最近強い女性と聞くと必ず百代さんが頭に出てくる。

まあこの物語のヒロインが百代さんだったら「私と勝つたら結婚してやる」なんて男らしいことを言つてすぐに解決しそうだから物語にならないと思うけど。

例え物語になつても売れないな。終始女の子と決闘してボコボコにされる内容の本なんて誰が読みたがるのか。いや、逆に読んでみたいかもしれない。

しかし毎度のことながら名前を聞いたことのない国の本を良くも集

められるものだと感心する。

その事を伝えると

「その言葉、川神書店で言ひてあげて下さい。親父さんきっと喜びますから」

と言われた

「川神書店には本当に世話になっていますよ。大手の書店ですから手に入れられない本をどこからともなく仕入れてくれるんですから。図書館長としてもお得意様をやらせてもらっています」

よかつたな書店のおっちゃん。」この図書館がある限りアンタの店は潰れることはないよ。

さて、一冊一冊丁寧な解説をされてしまつたため大分良い時間になつてしまつた。

そろそろ帰る事を伝えると、山野辺さんは慣れた手つきで本を紙袋に入れ始めた。

かなりの数があつたのだが、ものの数分で全てを紙袋に入れ終えた山野辺さんに関心しながら一人で合計6つの紙袋（入りきらざに本が数冊はみ出している）を半分ずつ持ち部屋を出て、職員の邪魔にならない様に受付カウンターに置いた。

「おー、悟。良いといひに来た。丁度呼んで貰おうと思つてたところなんだ」

と、そこでちやんと声を抑えながら俺の名を呼びやつてくる百代さん。

『探しに来た』ではなく『呼んで貰おう』と言つあたり予想通り氣で俺の位置はちゃんと把握されていたようだ。

「なんだこの紙袋は、もしかして全部本か?すごいな、こんなに借りることが出来るのか」

「いえ、この本は」ひびいてる山野辺館長が個人的に貸してくれた本です

紙袋の中を興味津々に覗き込んでる百代さん

本来この図書館で一度に借りられる本の数は10冊までと決まっている。

一冊でも多くの人に本を読んでもらおうとこう本好きには眩しきる精神を持っている山野辺さんにとって、いくら俺を気に入ろうともそれは破ることの出来ない鉄の掟。

しかし、ここに積まれているのは全て山野辺さんの私有する本だから問題ない。

図書館に入り浸るよくなつた初めの頃、一日に何度も通い詰める俺を見た山野辺さんが「子供が何往復もするのは疲れるだろう」と丁度自分が持っていた分厚い本を渡してきたのがきっかけ。
それ以来、最低一日は使わないと読み切れないような館長オススメの本をこうして貸してくれるようになったのだ。

え?図書館で読めって?
甘いぞ。

物語を読むときは書き手に最大の敬意をもつて最高の環境で読むのが俺のポリシー。

故に図書館を井戸端会議の場所と勘違いし、やかましい子供を放置

してゐる奥様方達の傍で読むなんてナンセンス！

やはり本は自室カリビングのソファーで読むに限るのだ。

「どうも初めまして御嬢さん。この図書館の館長を務めている山野辺です」

「初めまして。私の名前は川神百代だ・・・です」

朗らかに微笑む山野辺さんにペコリと頭を下げる百代ちゃん。
うむ、良きかな良きかな。

「しかし悟、これだけの量一人で持てるのか？手伝つおうか？」

紙袋の一つを軽々と持ちながら聞いてくる百代ちゃん。

「大丈夫ですよ。女の子に重いものは持たせられません」

「でも私はお前より力があるぞ？」

「力は関係ありません。ただの男の意地ですからこじは立てて置いてください。百代さんも自分より力が強いからって3歳児に荷物は持たせないでしきう？」

なるほど。と納得した百代さんから紙袋を受け取り、横2×縦3に
なるように他の紙袋を積み上げ

「ふんっ！」

と氣合を入れて一気に持ち上げる。

流石にかなり重いが家で読む時の事を考えれば全然苦にならない。

「それでは今日はありがとうございました。」これで失礼します

「またいつでも来てください。話題と本について話すことは私にとっては楽しみの一つですか？」

嬉しいことを言つてくれる山野辺さんを見送られながら図書館を後にする。

外は既に日も大分落ちてきてカラス鳴き声や豆腐屋のラッパでも聞こえてきやうな雰囲気だ。

商店街の方からは商売に勤しむおっちゃん達の元氣の良い声が響き、俺たちの他にも帰宅途中の学生が絶えることなく行き交っていく。

「あれ？百代さんは一冊も借りなかつたんですね？」

今さらながら百代さんが手ぶらな事に気づく。

「ああ、なんか家で読んだ汚した本からな。漫画ならお前から借りればいいし」

「それは俺の漫画なら汚しても構わないということですか？」

「悟の漫画なら気楽に読めるけどだよ」

あまり意味が変わっていないよ百代さん。

仲が良いから、的な意味で言つてるのは分かるけどね。

「あ、師範代」

百代さんがふと声をあげる。

視線の先をたどるとそこには黒系統のシャツにジーパンを履いたい
つものスタイルの川神院の不良師範代。釈迦堂さんがいた。
パチン口の帰りだろうか、その手には中々大きい紙袋を抱えている。
嬉しそうな表情からするに結構勝つたようだ。

「何だ、百代に坊主。今帰りか つて相変わらずだな坊主」

声をかけると同時に電柱の後ろに姿を隠した俺を呆れたような顔で
見る釈迦堂さん。

「相変わらずと言われてもすぐには治りそうしないんで諦めて下さ
い」

こればっかりは俺の意思が関係ない完全な条件反射なのだ。
おいおい直していくしかない。

「まあ別に良いけどよ、なんだ? その大量の紙袋? 中身は全部本か
?」

ススス サササ

中身が気になつたのか紙袋を覗こうと近づいてくる釈迦堂さん、と
それに平行にスライドして距離を離す俺。

「ハア

そういうやお前、小学校行つたら川神院に来るらしいじ

やねえか？道場の見学とか来なくて良いのか？」

数m歩いても距離が縮まらない事に釈迦堂さんは小さく溜息を吐く。こんな対応をとっても怒らないところを見ると、見た田や風評ほど根が悪くないのは確かだ。

「いえ、遊びに行つたときに見学してしますし」

初めて川神院に行き百代さん達と出合って半年、百代さんに招かれたり父さんに連行されたり自発的に行つたり。行く理由は様々だが20回は行つただろうつか？

「まあ楽しみにしておくわ。お前なら素養も十分だろうしな」

以前も百代さんに言われた事だが、今回は師範代からのお墨付きだ。普通は喜ぶところだろうが、良くある勧誘文句だと思つてしまつ辺り自分は随分と捻くれた子供だと思つ。

「平均よりやや運動神経が良いくらいじゃ川神院でやつていくには少し不安ですね　俺はちょっと普通じゃなく人の血を引いてるけど、俺もまた一般人ですから」

「・・・」

ん？百代さんの方から無言のプレッシャーを感じるのは何故だらつか？

「つい、時間がヤバイ！百代さん、釈迦堂さん、失礼します」

午後6時を告げる鐘の音が川神院の方から響いてくる。

「これ以上帰りが遅くなると母さんにまたいらない心配をかけてしまつ。

「……おひ、氣を付けて帰れよ」

「……またな」

不思議とややテンションが落ちて居る一人を尻目に家の方へと足を進める。

さて、どの本から読もうか？

今夜は夜更かししないように氣をつけよう。

side out

「ちょっと普通じゃない人の血を引いてるだけの一般人　　ね

先ほどの悟の言葉を反復しながら釈迦堂は思わずといった感じに眉をひそめる。

それは隣に居る百代も同じだ。百代にはそれに諦めたような表情といつものが追加されているのだが。

「なあ、百代、アイツ本当に自分で氣づいていないのか？」

「氣づいてないでしょ。絶対に」

「 「・・・」

「 「・・・はあ～」

しばらくの無言の後、二人は同時に溜息を吐く。これが師弟関係のなせる技なのか。

その視線の先には、「自分の倍の体積はあるつ本の山」をスキップしながら軽々と運ぶ悟の姿があるだけだった。

「悟ー、お前自分で思つてゐるほど普通じやないんだぞー」

そんな百代の独白も遠ざかっていく悟の耳には入ることはなく、街の騒音に消えていくのだった。

その日の晩。川神市限定ローカルラジオ番組にて

『やあ皆ー！今日も毎晩恒例5分間のハイスピードラジオ、川神ソウル のお時間だ。』

『時間が無いから早速一通田のお便りを紹介するよー川神ネーム少年A君（フ）から

いつも遊ぶ女の子がいるのですが、運動神経が良すぎてサッカーをしても勝負になりません。何か良いハンデはないでしょうか？』

『そうだね、勝てないなら足を使わせないなんてどうかな？

ハハツ！なんてね。それじゃあサッカーにならないか！しかしA君。君はそれでも男の子かい！女の子にハンデをつけてもらうなんて情けないぞ！その子に勝てるように練習するのが一番だ！頑張れ！』

『あー一通田のお便りはモモちゃん（フ）からだ。最近男の友達が出来たのだが、そいつは自分の才能に気づいていない。どうすればそれを自覚させられるだろうか？』

『才能かー。何の才能かは分からぬけれど、そうだね。まずは話して教えるのが良いかな？もしもその子がどうしても自覚しないならその才能を發揮せざる得ない状況に追い込んでみるのはどうだろう？』

『さて時間も無くなつてきたからこれが最後のお便り。おおーこれは久々の田撃情報だ！川神市七不思議の一つ 本小僧 が今日の夕方2週間ぶりに田撃されたようだ』

『え？本小僧は何かって？おいおい、それでも川神市民かい？

本小僧は自分の何倍の体積もある本の山を恍惚とした表情でスキンしながら軽々と運ぶという、一説では地方妖怪マグロの親戚との噂もある妖怪だ』

『見た目は小学校低学年位の子供だから持つて
いる本で生き埋めにされるらしいから見かけても話しかけてはいけ
ないよ?。お兄さんとの約束だぞ!』

『さて、今日の楽しい時間も残念ながらこれまでだ。今日は異性の
友人に関するお便りが多かったね。そうやって性別を気にせず遊べ
るのも幼いころの特権だ。皆仲良くしろよ!一
それじゃあまた明日会おう!グンナイ!』

「ジャスト一か円と一八〇だ、言い訳は済んだかよ？」

「はい、言い訳なんざいりません。

単純に遊びほうけて一か円以上更新放置しましたアホ作者の息抜きでいります。

いつも読んでくれている方々、「めんなさい。

しかもしばらく書いていなかつたせいで文章の書き方を忘れてしまつた始末。」

「マジ酷え文……」いつあ駄目だ、と色々な作品を読んで練習している最中だつたりします。

さて、今回お送りした第7話

キヤッピ での川神書店閉店危機イベントのフラグを既に折つている事の確認回でもあります。

次回で小学校編に突入兼川神院入り、です。

前にも書きましたが小学校編で原作キャラの多くと邂逅します。

この前とあるIS一次創作の感想で結構はつちやけた感想を書いてから恥ずかしくなった息抜きです
でも後悔はしていない。

ISのSSも書いてみたいなーなんて思つけど息抜きはバリバリの文系のため理系用語は苦手なのです。けつして用語を調べるのが面

倒だとかそんなんじゃありません

それよりもまずこの作品を完結させることが優先ですがねw

小学生編 第一話（前書き）

総合評価1000pt突破！？
しかも田間ランキング34位！？

急に評価が上がりすぎて本気でビックリしました。
たくさん的人に楽しんでもらえたみたいで嬉しいです^ ^
これからもよろしくお願ひします

s.i.d.e 悟

二十歳を超えると三十路なんてあつという間、なんて事は良く聞く話で、子供と大人では体感時間が違い、子供の1年は大人の1月なんて事を本で読んだことがある。

単純に考えると、6歳児の1年間というのはその人生の6／1になるが、60歳の老人にとって1年間はその人生の60／1になるのだから、当たり前と言つたら当たり前なのかもしれない。
勿論大人は多忙ゆえに時間が進むのが早く感じることもあるのだろうが、この際考えないことにする。それに、子供も遊びや勉強で中々忙しいものだ。

何が言いたいのかと言つと、俺は6歳児にも関わらず、恐らく俺の人生を左右したであろう去年の誕生日から今日までの時間。およそ一年間がまるで一月の事のように感じた、というだけの話だ。

原因は言わなくとも分かる人は多いだろう。

もしかしなくても百代さんだ。

以前図書館に百代さんと行つたのが半年ほど前（あれから百代さんは一度も図書館に足を運んでいない。「飽きた」だそうだ）。何がきっかけになったかは知らないが、その日以降百代さんは元々多かつた俺を外に連れ出す回数が更に増えた。

それはもう毎日と言つてもいい程で、百代さんはちゃんと鍛錬をこなしているのだろうか？と疑問に思つたほどだ。

連れ出す場所が河原や公園から近辺の山や海が増え、山では忍者のようす木から木に飛び移つたりする百代さんを追走し、海では海面を走る百代さんに「海に来た意味あんのかよ！」と突つ込みたくなるのを堪えながら泳いだ。

更には、なぜか川神院の合宿に「コース体験だ」と言われ雪の降り積もる長野の山にも連れて行かれ、他の門下生と共に雪で足場の悪くなつた山道を山頂を目指して練り歩いたりもしたのだが、そのお蔭で元々そこそこ良かつた身体能力にさらに磨きがかかり、50m走を6秒台、クロールで25mを19秒という7歳児とは思えないスピードを手に入れてしまった。

最近人外に少しずつ近づいている気がするのは多分恐らくきっと氣のせいだと信じたい。

そして俺の身体能力が向上する度に百代さんが「計画通り（ニヤリ）『みたいな顔を陰でしているのも目の錯覚だろ？』

そんな感じで自然に百代さん好みに肉体改造をされている気がしなくもない日々を送つてゐる内に、もういくつ寝るとお正月、なんてことを考えていたのがまるでつい昨日の事のように感じる程、いつ

の間にか時間が過ぎ去っていた。

まあ楽しく充実した日々を送れたと満足はしている。歳を取つてもいなくとも楽しい時間は早く過ぎるものだ。

閑話休題

突然で悪いのだが、半年の時間を経た俺は只今とある行事の真っ最中であつたりする。

改めて今の状況を報告をしたいのだが、最近はたつた一文字で現在の行動を端的に表すことの出来る言葉が流行つてゐるらしいのでそれを使ってみよう。

入学式なう

『 私たちは本校の生徒であることを誇り 』

4月4日

市立とは思えないほどの広大な体育館は最近新設されたらしく、新

人生及び関係者全員を収納してもかなりのスペース余らせている。

近年指定された学区外の学校でも希望すればその学校に通う事が出来るようになり、つい昨年設備の新設と増築がなされたばかりのこの学校はかなりの人気を博したようで今年の新入生はなんと324名。実にクラス8個分だ。

それに比例して入学式に参列したたくさん保護者の数を合わせるとその数は千を超え、少しだけ肌寒い今日には丁度いい熱気が充満していた。

並べられたパイプ椅子の一つに腰かけながら、俺はふと檀上で新入生代表の挨拶をしている利発そうな少年に目を向ける。

『 私たちは、この学校で過ごせる6年間。多くの事を学び、多くの友人と出会うことのできる6年間に、期待で胸を大きく膨らませています。』

男子小学生特有のソプラノボイス。俺の知っている子供はまだ舌足らずな子が多いのだが、檀上の少年は張りのある声で大人顔負けの綺麗な発音で挨拶を行っていた。

聞くに新入生が檀上で挨拶するのは今年が初めてらしい。

それほどにあの男の子が優秀なのか、それとも新設した記念に今から、と学校の意向なのかは分からぬが中学校や高校ならまだしも小学校で新入生が挨拶をするのは珍しいことだらう。

さて、何故入学式中に先ほどまでここ半年間の回想をしていたかと言ふと　　ただの現実逃避だつたりする。

人生初めての大きな行事。本来なら緊張やらでこんな事を考えている余裕なんてないのだが、こんな事を考えざる得ない状況を作つているとある人が原因。

やつぱり百代さんだ。

「（ギラギラ）」

俺が座つている席の約20m後方にある保護者席。

父さんと母さんに挟まれるようにして座つている百代さんがまるで親の敵を見るかのような視線を俺に向けているのだ。

その視線たるや絶対零度と呼ぶに相応しく、周囲の程よい熱気も俺の周囲だけ遮断されているようで春にも関わらず冬に逆戻りしたと錯覚しそうなほどだ。確か川神流の奥義の一つに気を冷気に変換する技があるのだが、まだそれは百代さんは使えない筈。

一般人は漠然と氣を感じる事しか出来ず、同じく一般人であるはずの俺がかなりのプレッシャーを感じるほどの、所謂強烈な「氣圧」で「

「ヒソヒソ（ねえ、あの黒髪の子凄い可愛いよね？）」

「ヒソヒソ（パパたちと同じように座つてるから誰かのお姉さんかな？）」

「ヒソ、ヒソヒソ（知らないのか？一年生の川神百代。この辺りじや有名な子だよ）」

俺の周囲は何事もないかのように平常運航だ。

恐らく気に指向性を持たせてピンポイントで俺に当てるのだろう。体外に放出した気の操作は上位の門下生しか出来ないと聞いたのだが、まあ百代さんなら、と納得してしまう。

現に隣に座っている新入生三人は百代さんに何度も視線をやつ正在るが、一般人が敵意のある強烈な気当てを受けたときに感じる眩暈や嘔吐感といった症状は特に見られない。

「ハアツ・・・・」

息苦しさに入学式が始まつてから合計30回田の溜息を大きく吐き出す。

身体機能に害を及ぼすような敵意のある強烈な気当てを式が始まる前から受け続けてかれこれ30分。好きな本の内容やさつきみたいにここ最近の出来事を思い返すなどして気を紛らわしてはいるが、正直そこぶる居心地が悪い。

普段から川神院にお邪魔させてもらい、気当てに対して耐性が出来ていなかつたら保健室直行間違いなしだつただう。

更に面倒なのがもう一つ。俺が体を動かしたら他の子に気が当たつてしまふ可能性があるので下手に動く事が出来ず、楽な体勢に変えることも出来ない事だ。

もちろん百代さんにはそんな事をしているつもりはないだろうが、状況的に「他の子に当てる欲しくなかつたら大人しく当たつて」と脅迫されている気がしなくもない。

何で初対面が9割9分を超えるこの場で人質取られるような状況にならなきやならんのか。

「ヒソヒソ（あー知ってるーよく河原で遊んでる子だろー）」

「ヒソヒソ（ああ、川の上走ってるの見たことあるー）」

「ヒソヒソ（それそれ）」

何も百代さんが俺に対して厳しい視線を送ることが無かつたわけではない。一年間も友達をやつていれば喧嘩なんて当たり前のようになる。

むしろ喧嘩つ早い百代さんと一緒にいて喧嘩しない方がおかしいと言つべきか、百代さんのアイスを間違えて食べてしまったり、徹夜で本を読んでいたせいで寝坊してしまい遊ぶ約束をすっぽかしてしまった時は大抵あんな感じだ。

しかし今回のように少年漫画よろしく、怒りの波動で川神流奥義の領域に一歩踏み出してるっぽい程怒ることはさすがに今まで無かつたのだが、これには多摩川程深く、鳥取砂丘ほど高いなんとも中途半端な理由があるのだ。

事の発端。いつなつた原因の、とある事実が発覚したのはつい今朝方。

目覚ましを鳴る前に黙らせてリビングに降り、ここ半年で恒例となつた家族+百代さんと朝食を摂つたのが事実発覚1時間前。ウキウキ気分で黒の半ズボンにドブレザーで正装した俺を見た百代さんから、「馬子にも衣装だな」と最近漫画で覚えたであろうアガたーいお言葉を受けて家を出たのが事実発覚30分前。綺麗に咲いた桜並木を歩きながら「小学校に入つたら何をして遊ぼうか?」なんてことを楽しそうに百代さんと話していたのが事実発覚10分前。

そして百代さんが校門と表札を見て驚愕の表情を浮かべたのが事実発覚20秒前だった。

「ヒソヒソ（うん、僕も思った）」

「ヒソヒソ（うん、僕も思った）」

そつ、こつなつた原因は単純明快至極簡単。

『

以上を持ちまして挨拶を終つさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。

俺が今日から通う小学校の名は田代さんの通う川神市立川神小学校

新入生代表、葵 冬馬

から南に5km程離れた場所に位置する、川神市立『南』川神小学校だ。

つまり、百代さんとは違つ学校なのだ。テヘペロ

「（ギンギー）」

「お、百代さんからの視線がさらに強くなつた上に服の袖が凍りついた
これは間違いなく氣を冷氣に変換し凍てつく波動で相手を氷漬けにする川神流奥義が一つ 雪達磨！
やつたねモモちゃん、奥義が増えたよ。」

俺も百代さんも同じ学校に行くもんだと思つていたからこれには驚いた。

事実が発覚する20秒前。川神市立南川神小学校の校舎を見て石像のように固まっていた百代さんは10秒ほどの時間をかけて石化魔法のレジストに成功。その後発した最初の言葉が

「 ジル・・・ビリーだ? 」

だった。

百代さん、俺と会話していたせいで自分が普段通学する道とは全く違つ道を歩いてこる事に気づかなかつたらしく。

仲の良い友人と入学式に向かう途中、まだ見ぬ学生生活に夢と希望を膨らませ語り合つておきながら違つ学校でした、だ。

百代さんじゃなくとも怒るだろ普通。

まあ百代さんの場合はその怒りの矛先を全て「ひびき」に向けていなけば良かったのだが・・・

なんて考えてこらつちに袖口の氷が徐々に俺本体へと向かってきている。そろそろ対策を考えないと氷漬けにされそうだ。

幸いなことにまだ見つかっていないが、こんな人が大勢いる中でそんなところを見られたら次の日からは雪達磨か雪男と呼ばれる」と間違いなし。

小学校入学式なのに学校生活より百代さんの方を気にかけなければならんとは・・・
どうやつて百代さんの機嫌を直そつか・・・

小学生編 第一話（後書き）

どうも、書くスピードが戻るどころか倍遅くなっている息抜きです。
マジで文章書けねえ。orz

さて、と言つわけで今回から小学校編突入！いやー長かつた、話数
じやそんなに長くないけどここまで来るのにリアルタイムで三ヶ月！
まじこじこが出来るまでに高校編に突入することが出来るのか不安で
あります

今回の話で分かる通り、残念ながら百代さんとは別の学校です。
冬馬とか準や英雄はもう私立に通つてそうなのですが、作中で明言
されていないことを良いことに作った独自設定。

まあ一般生徒めっちゃいる川神学園に通つてるし問題ないよね？
実は南川神小学校が去年改装が入った原因是九鬼グループだつたり
と裏バレしてみたり。

次回からはようやくオリ主 i n 川神院！

最強オリ主ストーリーが 始まりません。

作者が脈絡のない最強設定があまり好きではないのでちゃんと主人公には血の滲む努力をしてもらいます。（まあ身体スペックは十分チートと呼べるものだつたりするのですがね）

完全無敵全方向隙無弱点無最強ストーリーも好きですが、一番好きなのは一見強そうに見えるけど大きな弱点抱えてるっていう設定。（Aには勝てるけど相性の悪いせいでAより弱いBには勝てないみ

たいな)

時間制限とかも大好物。

残り稼働可能時間 3 分 !

0 . 1 秒の駆け引きの末 時間切れと同時に敵を倒す !

濡れる ! ! !

いつかそんな作品を書いてみたいですね。

小学生編 第一話

『冷凍ビーム殺人未遂事件 in 体育館』と俺自身にひつそりと記憶されることになった珍事から3時間後。雪だるまになる前に体調不良を訴えて保健室へと避難し、不名誉なあだ名を付けられることも変人扱いされることも何とか回避することができた。

何故か入学式中に腕が凍傷になるという事態に対し、摩訶不思議と頭を捻りながらも的確な処置をしてくれた保険医に感謝し、入学式が終わったタイミングを見計らって保健室を出た俺は、皆が教室に入る前には間に合つたのでそれほど目立つこと無くクラスメイトとの合流に成功。

運悪く入学前に面識のあった子達は同じクラスに一人もいなかつたのは寂しかつたが、仕方ない。何せ河原で一緒に遊んでいた子達は年齢も性別もバラバラだったのだから。

全員の自己紹介が終わつてしまえばすぐに解散だったので、クラスメイトの顔と名前もまだまだ一致していないが、どうせ毎日顔を突き合わせることになるのだ、少しずつ覚えていくとしよう。

ああ、そういうば入学式で新入生代表の挨拶をしていた・・・確かに葵君だったか・・・、彼だけは印象に残つていたので覚えている。

学校の事はこれくらいでいいだろう。他には特筆するような事は無かった。

さて、大切なのは今、なんてキザッたらしい台詞を言つつもりはないが、今俺が結構大事な局面にいることは間違いない。

ハプニングこそあつたものの無事に入学式を終えることが出来た俺は、校門を出ると同時に百代さんに拉致され川神院まで連れてこられ、現在百代さんに迫られていたりする。

「これが同意書だ。本日の日付、生年月日、本名を書いてここに判を押せばその瞬間から晴れて川神院の門下生だ。さあ書け早く書け今すぐ書け！」

まあ、迫られていると言つても、ラブロマンス的な要素は一切ないのはお約束と言つたところだ。

興奮で多少鼻息を荒くした百代さんが俺の鼻先5cmに一枚の紙をズズイと突きつけるのは、上部には目立つ様に一番大きく「同意書」と直筆で達筆な文字で書かれている紙。

言わずもがな

これは川神院に入門するための同意書だ。

「さあーさあーさあー！」

声に連動してズイズイズイと「」とに紙が突き出され、気づけば紙の揺れで風を感じる程の距離まで迫っていた。

同意書片手にはやく記入しろーと迫つてくる人物。

文字にしたら警察に通報すること間違いないし、怪しい人物の出来上

がりだ。

もし今の百代さんのように「売り込むセールスマンがいたとしたら誰も契約しないだらうし、するやつが居るとしたらそいつは間違いなく詐欺師の類だう。

「取りあえず落ち着け百代さん、つか紙が近すぎて内容が読めんわ！」

なんてことを考えながらも、取りあえず落ち着かせるために敬語なんて使わず頭をペシリとはたく。

「あうひ・・・

俺程度の攻撃が避けられないほど興奮していたのか、百代さんは可憐らしい悲鳴を上げて沈黙。

無意識の内に少し力を入れすぎてしまつたようで、少し涙目になりながら頭を抑える百代さん。その拍子に百代さんの手から離れた紙を拾い、文面を見る。

鉄心さんや百代さんを疑つているわけではないが、こいつら書類はちゃんと読むのが基本だ。いくら親しい人相手でも不審な文が無いかどうかしっかりと確かめよう。

まあ、書いてあることが『川神院に己の意思で入ることに同意する』しかないのだから不審になりようがないが・・・

「そもそも、こいつら書類は俺が書いていいんですか？普通親が書くものじゃ

紙についたしわを伸ばすように指でペシリと弾く。

川神院に入るための書類は昨日の段階で父さんが全て書き上げてい

て、俺自信が記入しなければいけない項目が無いことも確認済みだ。

「『いかに保護者が強く望もうと、本人に入門の意思が無ければそれを認めず』」

部屋に百代さんの声が響く。何を?と聞き返そうとしたが、いつもとは違い真剣な声色に言つタイミングを逃してしまつ。

同意書から顔を上げると、涙目で頭を押えていた百代さんの姿は無く、そこには声色同様真剣な表情の百代さんが鎮座していた。

「『これは川神院の門下生に課せられる一番最初の覚悟。己が決めた道に生き、己が決めた道を行く。川神院は武術のみを得る場所に非ず』」

『川神流は武術であり武道なり』

そう締めぐくつた百代さんが、少しの間を置いて再び口を開く。

武道とはその文字が示す通り、道だ。

その道を踏み出す第一歩を、背中を誰かに押してもうつて踏み出すのも間違いではない。

むしろ他人の勢いを借りる分、自分で踏み出すよりも大きく踏み出せるかもしれない。しかし、自分の足で進めた第一歩と比べると覚悟が少ない。

武道の道は一步田の勢いを保つたまま進めるほど短い距離ではないのだ。

時に休み、時に引き返し、時には諦めてしまつだらう。

その時に必要になつてくるのは「口を奮い立たせる強い意志、強い覚悟。その覚悟を得るための最初の試練がコレ。

俺はまだ道に立つてすらいない。第一歩を踏み出す準備すら出来ていない。

だからこれは俺が第一歩を踏み出すための第一歩。

自分で踏み出さなければいけない一歩なのだ。

とまあ、難しい単語がチラホラと出てきたが要約するとこんな感じ。

「何度もしつこく誘つていた私が言うのもなんだが、自分の意思で入院しない者に川神流を教える程川神院が抱える事の出来る人数は多くない」

少しの間を置いて百代さんは続ける。

「そもそも川神院本院には一分の例外を除いて中学生以下の入門は認めては居ない。支院ではその限りじゃないが、基本的にそう思つてくれて構わない。川神流を学ぶ人が増えるのはいいことだが、そのせいで質が落ちてしまつては元も子もない。だから本来は川神院に入るためには厳しい審査を潜らなければならぬんだ」

確かに、少林寺拳法を学ぶための学校は万を超える子供たちが通つているといつ。

少林寺同様、世界有数の武術院である川神院。それをブランドと勘

違った親が川神院に子供を入院させようとするのは想像に難くない。

その他にも川神流の奥義を盗もうとするもの、邪な理由で川神流を修得しようとするもの、そういう者たちを警戒するのは自然なことであり実際に何度も入ろうとする輩が現れたらしい。

正直言つて、俺がこの年齢でこんなにもスムーズに入院出来たのは「コネ」としか言いようがないのだ。

「つまり、俺のようにある程度武術に対する適正があり、なおかつ自分の意思で学びたいと思わないところの年齢じゃあ入院は認められない」と？

「そう、それが最低条件。後は、ぶっちゃけ「コネだな。」

やつぱり「コネですか

しかし納得はできた。ここに居る人たちは全員が本気で川神流を極めようとしている人たちばかり。

その人たちに、お互いを指導し合いつことはあっても、懃々子供に指導するような余裕はなく、その経験も無い。

「じゃあ一体誰が教えるんですか？今の話を聞くと俺の存在は迷惑以外の何物でもないんじや」

「言い方は悪いが事実だ。子供相手に指導出来るとしたら指導の経験が豊富なルーさんや爺、師範代補佐以上の人達だが、逆に指導で常に忙しい彼らをたつた一人の子供に当てる余裕はない」

淡淡と言つ百代さん。

何やら先ほどの決意が揺らぎやうな程の罪悪感が俺の心を占めてきて
ているのは氣のせいではない。

「ただし、迷惑といつ話は師範代や門下生達が指導すればの話だ。
忘れていいか？適任がいる」とを

俺に指導出来るほどの技術を持ち、俺に指導出来るほどの時間がある人物。

考え始めれば数秒で答えができるほど簡単な問いただ。

「そういえばいましたね。俺と近い背格好で師範代補佐に近いレベルの人が」

「そう、という訳で抜擢されたのが私という訳だ。幸いお前の背格好は私と殆ど同じだから、指導もしやすいし年齢も近いから接し易い。そもそも友人な訳だしな」

「しかし百代さんに指導経験は？」

当然の疑問を口にする。

百代さんは実力こそ既に川神院の平均を超えているが、それが直接指導能力に繋がるとは限らない。

名選手が名監督になれるとは限らないとは良く言ったものだ。

「無い。正直上手く指導する自信も無い！」

「これまたキツパリと言い切りましたね」

「やつたこともない事に自信を持つほど私は自信家ではないぞ」

「友人だから甘くするとこいつのま？」

「私がすると思うか？」

「しないでしょうね」

サッカーでキーパーが泣き叫ぼうと無慈悲にハットトリックを決めるという、基本嗜好がSの方に傾いているお方だ。
友人だからといって加減することはあっても手を抜くことは考えられない。

加減・・・してくれるよね・・・?してくれないと俺が死ぬ。

一つ一つ疑問が氷解していくのを感じながら改めて同意書を見る。話を聞けば聞くほどこの紙の重要性が分かつてくるというか。

「もしかしなくてもこの紙、滅茶苦茶重いものじゃないですか」

物心ついた時から川神院に居て武術に触れていた百代さんならともかくとして、一年前に初めて触れた俺には先ほどの話は少し重いもの。

しかし、真剣に打ち込む川神院の人々を見て、武術に尊敬の念を抱いているのもまた事実だ。

「他に質問はあるか?」

「ありません。じゃあ書かせてもらいます」

「あります。じゃあ書かせてもらいます」

「百代さんと川神院との間のかけになつたのは親に連れてこられたから。

川神院に入らうと思つたのは百代さんに勧められたから。

思えば周りに流されてばかりで決めた入院だ。最後くらいは自分自身の意思で決めよう。

「文字一文字に、その思いを込めるように書いていく。

力を入れすぎて歪になつてしまつた文字に、誤字がないかを確認して渡すと、百代さんは丁寧に一つに畳んでポケットにしまつた。

「確かに確認した。今この瞬間からお前は川神院の一員だ。それ相応な態度を日頃から心がけるよつになつはあ

よつやく終わつた、と大きく溜息を吐き出すと百代さんは正座を崩してその場に寝転ぶ。

「お疲れさま。随分と頑張つて喋りましたね」

「駄目だ。堅つ苦しきのはやつぱり性に合はなか

ヒラヒリと手を振りながら「口口口」と転がる百代さんの服装は際どいものになつてゐるが、そこは一年間の付き合つだ。もう慣れた。

「鉄心さんに同意書を出すつこでにお茶でも飲みませんか？勿論俺が淹れます」

「こゝなそれ。よし早速こいつ

誘つた側がお茶を入れるのは当たり前。といつか百代さんはお茶を淹れることが出来ないので俺が淹れるしかないのだが。

「ほーー。」

足の勢いだけで立ち上がった百代さんが元気よく襖を開け、外に出るのを確認した俺はゆっくりと立ち上がると、追いつくために急ぎ足で部屋を後にした。

「それにしても、よつやく悟も川神院の門下生か」

軽いスキップをするよつに歩いていた百代さんは、その足を緩めるとふと顔をあげてそつに言つた。

「どうしたんですか？ 隨分と嬉しいですね」

「嬉しいといつはワクワクしている。私はこの田を半年以上待つていたんだぞ？」

そういえば百代さんと出会つてから1年近くが経つたのか。百代さんの勧誘は毎回聞き流していたから覚えていないが、今考えれば会つたびに、それこそ挨拶代わりに言つていた気がする。

「お前がここに入った。それだけでこんなにワクワクしているんだ。お前が私と同じステージまで来れたとき、その時はどれだけ嬉しいんだろうな？」

急に小走りで俺を引か離した百代さんは、その場でぐるっと回転してこちらを向いた。

出合った時から少しづつ伸びた綺麗な黒髪をサラリと流し、百代さんはそう言いながら、やはり嬉しそうな笑顔を浮かべた。

それは普段見慣れている俺からしても思わず見惚れてしまつほど綺麗なもの。

「…………ええ、了解しました。いつかそつちまで行きますから、精々準備して待っていてください」

自然と緩んだ表情を引き締め、挑発的に言つ。

出来ない約束はしない事を信条にしているが、今へりこはしてもいいだろ？

女性の期待に応えるのが男つてやつだ。父さんの受け売りだけど、たまにはそれに乗つ取つてみるのも悪くない。

「ああ、楽しみにしてるよ。改めてよろしくだ」

百代さんと出合って、丁度一年が経つたこの日。俺は川神院の一員となつた。

「ちなみに鍛錬の日程だが、最低週6以上は覚悟して貰ひやつ。」

「殆ど休みなし！？」

あとがき

さてはて気づけば最後の更新から四か月。皆様お久しぶりでござります。息抜きです。

一日一行コソコソと書くよいつな地道をかけてよいつかく更新できました。

やつと就職試験が終わつたので、出来るだけ早く更新していきたいと思っています。個人的には一週間に一話投稿出来ればいいかなー、なんて。（フリグ）

それにもこの百代、知的である。

いや、原作の百代が知的じゃないっていう意味じゃないですよ？單純に原作と比べてワンパクさが足りないといつか、半分別キャラになつてるような・・・？

百代さんの幼少時代と言えば良くも悪くも口に誠実なワンパク少女、と言つた感じなのでその良さを再現したい。

皆さんの中にはまじ一〇〇〇の体験版、すでにプレイした方もたくさんいると思います。未プレイの方は是非やってみてください。今回もかなり面白くなっていますよ。

しかしクローン組が可愛すぎて生きるのが辛い。特に弁慶さんは息抜きのストライクゾーンど真ん中を抉つていきました・・・

小学生編 第一話 裏

悟が川神院に入った日の夜。

川神院師範代である釈迦堂と、師範代候補として現在名が上がるほどの実力者であるルーの一人は、鉄心に呼ばれ彼の自室に来ていた。他の部屋同様に畳みに障子と、純和風な部屋だ。

意外なことに鉄心の自室は客間よりも狭く、調度品も少ない。川神院の道場や客間などと同様、『勇猛邁進』と達筆な文字で書かれた掛け軸がお決まりのように掛けてあるだけで、他には衣類の仕舞われた箪笥が置いてあるくらい。

知らない人が訪れればこちらの方を客間と勘違いをしても不思議ではない。

そんな質素な部屋の中央に、鉄心を含めた三人は円になり畳の上に座していた。手本のような綺麗な姿勢で正座するルー、足を崩して胡坐をかく釈迦堂、少々背中は曲がっているもののそれを下品と感じさせず正座をする鉄心。

各々が座る体と畳の間には座布団が挟まれ、その横には湯気が昇る湯呑が置かれている。

三人が囮むようにして座っている畳には、一枚の紙が置かれている。畳間に悟が書いた同意書だ。

「ほつほ、見て見なさいこの文字を」

長く蓄えた髭を撫でながら、鉄心は目を細め紙に書かれた悟の字を撫でる。力強く書かれたせいでインクの滲んだ文字の上を皴が多く入った指が通る。

歪で読みにくい字だが、そこから悟の想いを感じ取った鉄心は細め

た目を自然と柔らかくさせた。

「はい、拙いながら決意がはつきりと見て取れる字ですね」

鉄心を見たルーが紙を受け取る。良い字だ、と再び呟いたルーは鉄心に習うように自分も文字に指を這わせ、やはり習うように顔を綻ばせた。

次に紙を受け取ったのは釈迦堂だ。太ももに片肘をつき、見下ろすように紙を眺めた釈迦堂は、

「というよりは、単純に気が込めてあるだけだろ?」

「釈迦堂?」

水を差すような物言いに、ルーの視線が厳しくなる。

「あー、『気は思いから発する』だろ? 坊主の覚悟は本物つて認めてる。別にちやかしてる訳じゃねえよ」

面倒なヤツ、と心の中で呟いた釈迦堂はその心中を隠そうともせずに頭をボリボリと搔きながらルーから視線をそらした。

二人の間に険悪な空気が流れる。が、それはいつものこと

「まあまあ、二人とも落ちつかんか」

慣れた様子で一人を諫めた鉄心は、手を太ももに置き一度間を置く。ルーが了承の言葉と共に姿勢を直し、釈迦堂も一先ずは話を聞く程度の体勢に戻した。

それを確認した鉄心は、

「一人から見て、悟君の入院についてはどう思うかね?」

問い合わせに一人は考える。ルーは数秒目を閉じ、釈迦堂は顎に手を置き、知りえる範囲での悟を自分なりに考察する。

「私から見ますと、7歳児には思えないほど礼節をしつかりと備えている落ち着いた少年です。武術の才能に関しても、百代から聞いたことや私自身の目で見た事を合わせて、優秀な部類と判断します。現時点でも分かる通り、武術を修めなくても高い戦闘力を保持することが想像されることから、川神院で力の使い方を教えた方が良いと考えます。彼には無作為な力を振るうような人間になつて欲しくは無い」

言つたのはルーだ。一息で喋り終えたルーは自分の意見は全て話した、と湯呑に手をかける。

次に釈迦堂が促されるような鉄心の視線に応え、

「それに関しては俺も賛成だ。あの小僧を放つておくのはちと勿体ない」

珍しくも釈迦堂とルーの意見が一致する。

といつても、ルーは悟の将来を含めて自分自身が最良の結果に繋がると考えた事に対し、釈迦堂は『ただ強者と戦いたい』という行動原理から同意したに過ぎない。

一人の武術家としても人間としても悟の成長を願い期待するルー。

一人の強者として自分の戦闘欲求を満たすために悟の成長を企む釈迦堂。

意見の一一致と動機の相違。

そのことを釈迦堂もルーも理解している。しかし、そのことを指摘

したところで話がただ長引くだけだ。と理解している一人はお互にそれ以上言うことは何もなかつた。

「ふむ、二人の見解は川神院の大勢、および儂と同じものじや。故に本日をもつて川神院は識丈悟の入院を歓迎した」

逆に言えば悟の入院に対して一部では否定的な意見も出ていたのは事実だ。しかしそれは『子供』という理由が大きく、一人一人鉄心が説得することでその意見は数を減らしていった。

全てがなくなつた訳ではないがそれは仕方のないこと。全ての人間の思惑が一致することなど難しいことなのだから。後は悟が自らの力で信頼を勝ち取るしか方法は無い。

「そして、ここからが本題じや」

既に空になつた湯呑を置き、鉄心は切り出す。

「二人には悟君の師事を頼みたいのじや。勿論一人が多忙なことは理解してある。時間が空いた時にだけでも見てやつてくれんかのう？」

その言葉にまず反応を示したのは釈迦堂だ。鉄心に対しても相変わらず不機嫌そうな表情を少し意外そうに変え、釈迦堂は、

「別に構わないけどよ。なんで俺なんだ？他に適任がいるだろ？」

そもそも悟との相性を考えると真っ先に候補から外すだろ？。少なくとも自分ならそうする。と考えた結果の意見だ。

昔のように出会つた瞬間に10mの距離を取られる事こそ無くなつたが、未だに悟が釈迦堂に対して苦手意識を抱えていることには変

わりない。

そしてもう一つ。釈迦堂は実力だけを見れば鉄心に次ぐ川神院のN。・2だ。しかし、精神面を克服出来ていない、と度々評されているのは自他共に知るところ。そんな釈迦堂が悟に思想に悪い影響を『』えるのではないか。

自虐的だが事実だ。と自覚しているから』その意見。話しを聞いた鉄心は、ふむ、と頷き

「彼が時折放つ氣の事は、一人とも既に知つておるだろう?」

「百代と初めて出会つた時、合宿に同行し雪山を登つた時。前者では身の危険を感じたとき、後者では自分の体力が極限状態になつたときに発現しましたね」

氣とは、本来数年の年月の修行を経てようやく習得するものだ。そして川神院において氣の修行は全部で五段階で行われる。

第一段階『自己の認識』

第二段階『氣の認識』

第三段階『氣の発現』

第四段階『意識下での発現』

第五段階『制御』

悟は何の修行もせずに第二段階である『氣の発現』に到達している状態にある。

ただ、それが例外という訳ではない。

「武術を習う訳でもなく氣の扱いを知る者は時折居る。釈迦堂君がそうだったようにの」

氣とは産まれたときから人間が持つ潜在的な能力。

初めから持っている力に無意識下で氣づき、それ行使するものは稀にいる。それが肉体に効果を及ぼすか、それとも氣迫のような形を持たないものに効果が出るかは人それぞれだが。

鉄心の言葉に釈迦堂はようやく納得する。

自然な環境の中自力で氣の発現をしたという共通点。それが自分が選ばれた理由なのだろうと。

ルーが選ばれたのは実力、指導経験、悟との相性を総合的に考えれば自然なことだ。

「だけど、あいつの氣は素人にしちゃ安定している。ってところか？」

「その通り。彼の気は安定”しそぎて”いる”。それこそ、氣の修行に関しては少しの時間をかけばすぐに終えてしまう程に」

釈迦堂の考察に鉄心が肯定をする。

釈迦堂とルーの頭に、天才、という単語が浮かぶ。

「しかし、百代からある話を聞いたことがあっての。既に氣を発現しているならば、と好奇心から悟君に遊びと称して氣の修行をやらせたことがある、と」

鉄心の言葉に一人は違和感を覚える。

「その修行の期間とは？」

「毎日は出来なかつたようでの。度々日ひを空いたが、一月はやつたと言つておつた」

ルーの問いに鉄心が答える。

「それちょっとおかしくねえか？”壁”は越えたんだ。一月もすりや自在とは行かずとも流れに自分の意思で発現出来るだろ」

「私たちが見ていないだけで、すでに悟君が第四段階まで到達しているといふところのは？」

一般的に気の習得における最大の難所は第三段階曰と言われている。そして、そこを超えてしまえば氣の習得”だけ”はしたと言つても良い。

一度でも気が発現してしまえば、あとは体が感覚を自然と覚えるため、數度繰り返せば自分の意思で簡単に発現させることが容易なのだ。

それが第四段階である『意識下での発現』。才能の無いものでも一週間もあれば到達可能とされている、氣の修行に置いて一番簡単とされる段階だ。

しかし、釈迦堂とルーは悟が自分の意思で氣を発現させたといふを一度として見たことが無い。

「今日儂が見たところ、悟君の氣の状態は第三段階。一年前の状態と変わらず『氣の発現』のままじや」

ルーの考えが否定されたことにより、一人の違和感は益々強いものとなる。

第四段階に至るための修行を百代によつて悟は一月も受けているといつ事実。自然の環境の中で第三段階まで到達したほどの才能の持ち主が、何故一番容易とされる所で行き詰つているのか。

更に言えば第五段階である『制御』の初步。『安定化』を先に終えているにも関わらず、だ。

人によつて得手不得手があることは、指導経験の豊富なここに居る全員が良く理解している。しかし、余りにも極端すぎる。第三段階を無意識に終えているということは、無意識に気の扱い方を体が知つていいという事。体は知つている事を意識的に行つよう切り替えるだけなのだから。

「悟君が才能豊かなのは周知の事じゃが、そのまま捉えるにしては少々違和感を覚える。儂も随分と長生きしてきたが、悟君のような子は初めてじや」

無論、気の状態だけを見て判断したわけではない。

鉄心の武術家としての勘が、今まで見てきたどの才能とも悟が持つものは違ひのだと、そつ告げる。

一息をついた鉄心は先ほどまで細めていた目を開き、川神院総長としての顔に変え

「そこで武術に対し心に重きを置くルー君。逆に武に重きを置く釈迦堂君。対極の思想を持つ二人の指導をもつて悟君を育て、そして儂自身の中にある違和感が何であるのかを突き止めたい。異論は？」

「あつません」

「無え」

一人の返答に頷いた鉄心は、引き締めた顔を緩める。

「ではこの話はこれにて終了とする。夜遅くに呼び出しますなんかつたの。今夜はゆっくりと休み、明日からも頼むぞ」

二人が退室した部屋に一人残り鉄心は思う。

悟はまだ七歳だ。

七歳。平均寿命から考えれば人生の十分の一も生きていない。成長期が終わり、考え方も固まつてくる十数年後。このまま悟が良い方向で成長していけば願つたり叶つたりといふやつだ。そしてこのまま成長していけば、鉄心が願う通りになるだろう。

次に自分の孫の顔を思い浮かべる。

歴代でも随一の才能を秘めている子。世界でも五指には入るだろう武術家になる未来を、想像するのは難しくない。

ただ不安を覚えるのは精神面の事。性根は優しいが、やや力尽くで問題を解決したがる傾向にある。今のところは大きな問題は見られないが将来的にどちらかに転ぶかは微妙な位置に現在の百代は居る。戦うためだけに生きる修羅か。戦いを人生の指標の一つとして生きる武術家か。

時間はまだ豊富にある。しかし、その時間が吉と出るか凶と出るか分からぬ以上、現状打てる手は全て打つておきたい。

だから鉄心は悟の担当に百代を抜擢した。常識が無い判断だということは自分でも理解している。院内からも反対意見が多く出た。しかし、半世紀以上に渡る指導経験、武術家としての勘がこの選択を良いと告げた。そして長く考えた結果、それが良い方向に繋がると、鉄心は半ばそれを強行する形で決定したのだ。

悟が百代を正しい道へと導き、また悟を百代が導いてくれる事を祈り、信じ。

「雛が殻を破る前から心配しそぎかのう。ほつほ」

自嘲するように鉄心は笑う。窓から外を眺めると満月を見た。登り具合からして既に10時過ぎといったところ。

少し冷えた体を温めようと、湯呑を口に近づけ、空になつた事を思い出し置く。

既に子供たちは夢の中だろう。昼間元気に走り回っていた孫”二人”の幸せそうな寝顔を想像する。

「どちらにせよ儂が彼らにしてやれることは少ない。導くことは出来ても並び歩くことは出来ぬのだから」

眩き、鉄心は白室を後にした。

後に残つたのは温もりの残つた三つの座布団と、中身の無い湯呑だけ。肌寒い空氣に触れ、徐々に熱を失つていく。

一方その頃の柊宅

『分かってるな！明日は学校が終わったらすぐに川神院に来るんだぞ！』

「もうこれで6度目ですよ百代さん。ちゃんと覚えていますから30分毎に電話していくのやめて下せよ」

『明日から忙しくなるからな。今日は早めに寝てしっかり体を休ませておけ』

「はいはい、この電話が終わったらすぐに寝ますって

『やもれもこの時間まで起きている事自体

「百代さんが電話していくせいでしうが……」

大人たちの憂いなど気にする」とも無く、子供たちの夜は更けていく。

鉄心が迷惑電話を繰り返す百代に気付くのは、湯浴みを終えてからの事。時間にして30分以上経ったあの事だった。

小学生編 第1話 裏（後書き）

あとがき

一週間以上かかってしまいましたがなんとか更新できました。どうも、作者の息抜きです。

今回は鉄心たちの話に対する考察。荒があるのはお約束。むしろ荒しかないよう見えるのは気のせいではありません

気の説明に関しては独自設定でござれます。

何か習得簡単じゃね？と思つたけど、まあガクトの母ちゃんも使えることですし（まあの人も大概規格外ではありますが）

それはそうとお気に入り登録500件突破！
本当にありがとうございます^_^

もうそろそろ総合評価1400点も超えそうと、嬉しさを通り越して少し怖くなっています。主に良いものを書かなくては・・・といつプレッシャー的に

読んでもらえて感謝です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5869s/>

真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

2011年12月1日14時54分発行